

五十音

ア行	ア a	イ i	ウ u	エ e	オ o
カ行 k	カ ka	キ ki	ク ku	ケ ke	コ ko
サ行 s	サ sa	シ si	ス su	セ se	ソ so
タ行 t	タ ta	チ ti	ツ tu	テ te	ト to
ナ行 n	ナ na	ニ ni	ヌ nu	ネ ne	ノ no
ハ行 h	ハ ha	ヒ hi	フ hu	ヘ he	ホ ho
マ行 m	マ ma	ミ mi	ム mu	メ me	モ mo
ヤ行 y	ヤ ya	(イ i)	ユ yu	(エ e)	ヨ yo
ラ行 r	ラ ra	リ ri	ル ru	レ re	ロ ro
ワ行 w	ワ wa	ヰ wi	(ウ u)	ヱ we	ヰ wo
ガ行 g	ガ ga	ギ gi	グ gu	ゲ ge	ゴ go
ザ行 z	ザ za	ジ zi	ズ zu	ゼ ze	ゾ zo
ダ行 d	ダ da	ヂ di	ヅ du	デ de	ド do
バ行 b	バ ba	ビ bi	ブ bu	ベ be	ボ bo
パ行 p	パ pa	ピ pi	プ pu	ペ pe	ポ po

はねる音。

ンの處に n を使ふ。

ベンキョー Benkyô, カンナン Kannan,  
 ジンミン Zinmin, デンポー Denpô,  
 クワンイン Kwan'in, ケンヤク Ken'yaku.

拗音

キ + kya	キ ャ kyu	キ ョ kyo
シ + sya	シ ャ syu	シ ョ syo
チ + tya	チ ャ tyu	チ ョ tyo
ニ + nya	ニ ャ nyu	ニ ョ nyo
ヒ + hya	ヒ ャ hyu	ヒ ョ hyo
ミ + mya	ミ ャ myu	ミ ョ myo
リ + rya	リ ャ ryu	リ ョ ryo
ギ + gya	ギ ャ gyu	ギ ョ gyo
ジ + zya	ジ ャ zyu	ジ ョ zyo
ヂ + dya	ヂ ャ dyu	ヂ ョ dyo
ビ + bya	ビ ャ byu	ビ ョ byo
ピ + pya	ピ ャ pyu	ピ ョ pyo
ク ャ kwa	ク ョ gwa	

引く音。

母音の上に ^ を付ける。

タロー Tarô, チョーチョー Tyôtyô,  
 クーキ Kûki, オバーサン Obâsan.

つまる音。

次に来る子音を二つ重ねる。

ガッコー Gakkô, ケッシテ kessite,  
 キット kitto, テッポー Teppô.

理學博士 田丸卓郎著

# 羅馬字文の書き方

附日本式羅馬字の論

# 日本式羅馬字

理學博士 田 丸 卓 郎

此編は明治三十九年六月申讀賣新聞に連載したものを補ひ且つ刪つて訂正したものである。

## 一、羅馬字の必要

世の中に日本語を羅馬字で寫すやうにせいと云ふ論者は少くない、こゝにいふ人は各其様な考を起すに至た理由があつて、其話を聞いて見ると皆尤な論である。而も其理由は一通りや二通りではない。只一通りでさへ尤な論であるのに、そんな理由が幾つもあつては、無論羅馬字は早晚口

### 附 目 録

一	羅馬字の必要	一
二	ヘボン氏流の綴り方	六
三	日本式羅馬字の綴り方	三
四	羅馬字と假名遣ひ	六
五	名詞の初の字を大文字で書くこと	六
六	長音の符と音を切る符	五
七	羅馬字で書く文體と單語	七
八	語の切り方のこと	八
附言	羅馬字廿六文字の名前について	六

本語を寫すに正當な方法と認められるやうになるに相違ない。此やうな理由を論ずることは、まだ其等のことに注意しない人々に對しては極めて要用な事であるけれども、今は次に私の考へて居る點丈を簡單に書くに止めやう。丸山通一君の著された「羅馬字のすゝめ」といふ小冊子(價五錢)には尙色々のことが具體的に書いてある。

私は要用な理由を二つに區別してよいかと思ふ、内に向ての理由と外に向ての理由、即ち日本人自身に對しての理由と外國人に關係する點から見た理由、一は日本人の教育上の經濟の點に其最も重い論點があり、一は世界に日本國民が發展する點に最も重い論點があると思ふ。

第一の日本人自身に對しての理由たる、教育上の經濟に就て見るに、今

迄の日本語の書き方の不條理なることは、小中學校等で語を學ぶと云はずに字を學ぶと云うて居るので解る。一體、智識思想を發達させる道具として、語を學ぶことの必要なるは止むを得ないことであるから、學校で語を學ぶといふことは至當であるが、それを差措て「字を習ふ」と人が云ふ程迄に、單に言語の符號に過ぎない字が小中學校で學ぶ物事中の主要のものとなつて居るのである。これは、昔のやうに學ぶべき事項の少なかつた時代ならば知らぬこと、今日のやうに、有用な、學ぶべき實地上の事件があり餘る時代には、語を學ぶ事すら、可成經濟的にしたいと思つて居るのに、其語の符號を學ぶのに骨を折り時を費して居るのは、餘りに不經濟で決して我國民の發達する所以ではあるまい。又、語を知て居

ても、字を忘れれば、それを思ひ出す手蔓がなくて書く事が出来なかつたり、書いてある新熟字杯を見ると意味が解つて居ても讀むことが出来なかつたり、無用な苦勞と不便をしなければならぬのは馬鹿くしい。「それは漢學の素養が足りない人の論で、自分の力の足りないのを標準として他を論ずるのは不都合だ」と云ふ人もあるが、現に相當の教育を受けたもの、内に左様に素養の足りない人が澤山にあるといふのが、漢字を使ふ爲めの學問がどれ程六かしいかを示す所以である。語を表はす符號には決してこんな六かしいものを一般の日本人に強ひる丈の値があるものではない。又現行の漢字交りの文の間に合せのなるとは、所謂「當て字」なるものを見ても充分よく解る。「目出度」「矢鱈」「都合」の

類。こんな字に至ては他の普通の漢字に於て取るべき點さへもない。通常漢字によい點と思はれて居る性質は勿論ないではない。書いたものを見て意義を覺り易いと云ふが其の要な點であらう。併し此點がどれ丈の値があるかは今よく解らない。人が今假名交り文に慣れて居るやうに羅馬字を使ひ慣れて見なければ、羅馬字其物と漢字其物とに就て上の點に關する比較の論は出來ない。西洋人が羅馬字の日本文を讀むのは、日本人がそれを讀むよりも早く且つ確かであると云ふ事と、又或西洋人に至ては日本人が通常の文を讀むよりも早く羅馬字文を讀めると云ふ事とを考へると、上の比較は只、今の日本人の習慣上から來たもので、慣れさへすればどちらでもつまり同じものかも知れない。假に漢字の方が

必竟多少羅馬字よりも読み易いとしても、其利益は決して各語毎に其符號を一々學ぶの勞と時とに値するものであるまい。現に西洋の多くの國は皆羅馬字を使って、よくやつて行て、日本よりもよく開化して居るではないか、漢字を用ひて居る支那は却て開化して居ないではないか。上に云うた事は、要するに、漢字を廢せねばならぬと云ふ議論で、日本語を表はすに、假名、羅馬字、乃至他の新字を使ひさへすれば、どれでも其主張する處に協ふわけである。即ち日本人の教育の經濟上から見れば、假名、羅馬字、新字等は、大體に於て同様な地位にあるやうに思ふ、(尙立入て論ずれば無論種々の長短を論ぜられるけれども)。併し上に掲げた第二の點即ち日本人が世界に發展して行く點から見ると、此等の間には

見易い重大な差があつて、是非共羅馬字に決めなくてはならない事が解る。

現今世界で學術工業其他萬般のことで先進國と云はれる國の語は、英語、佛語、獨逸語等であつて、此等の國語は皆羅馬字を使って居る。國語が皆違て居るけれども、之を表はす字が同一であるが爲めに、例へば獨逸人には英語や佛語が見易く書き易い、又或度迄は読み易い、故に之を學ぶのが容易いし、又習ふ氣にもなる。露西亞語になると字が違ふがために隣國の獨逸人でも露語を習ふ人が少い。日本は、近年の長足の進歩發達、特に日清戰爭日露戰爭で、世界の人の驚嘆を受けて居るから、物好きの爲のみでも世界の人は日本語を習て見やうと思て居る。併し本式の日

本語が現在のやうに漢字と假名で書いてあるものでは、露西亞語どころではないから（露西亞字はやはり横書で字體も大體羅馬字に似て居る）中々それを習ふ氣が出ない。よく／＼の物好き又は必要によつて日本語を習ふものでも、僅かに羅馬字で書いた日本語を學ぶことと満足して居る。この様に、漢字假名交りの書き方は到底全世界の外國人に日本語を習はせるのに適當して居ない。一體、學術實業何れを問はず或方面に於て世界に重きをなさうと云ふには、其國語が相伴て世界に擴がらなければならぬ。學術界に獨逸が一番發達して居ると云へば、獨逸語が諸外國にも一般に其途のものに研究される、英米國人が商工の實業に重きをなすと云へば、全世界の商工業に従事するものが皆英語を學ぶやうにな

る、其國の語學が研究されれば其方面に其國が重きをなして居ることが實になる、其地盤が鞏固になる。今、日本が學術乃至實業界に重きをなすやうになるにした處で、其國語が諸外國人に研究せられなければ、他に仕方がないから、外國語によつて其學術を發表し其實業上の取引をする。吾々が現在やつて居る通りにするより他に仕様がなない。然るに、吾々が外國語を學ぶとすれば、之を習ふのに非常の時間と勞力を費すのみならず、習たものが多くは間違ひだらけである。少數の俊秀の外國語學者はよくやるかも知れないが、多數の人には満足のものが書けない。それを以て學術論文を出せば、論旨が誤解されたり、明瞭を欠いたりするし、實業に従事したら色々の手違が起たり、又遣つた文面が、推測が出來て

も不明瞭な爲に、人が安心して取引しなくなつたりする。要するに、他國語を使つてやるのは、他人の道具で仕事をするのだから、物事がうまく行く理窟がない。これは決して何れの方面にもせよ日本人が世界に發展する所以ではない、日本人が何事に限らず世界に要用地位を占めやうと云ふには、自國語を以てやつて行かねばならない、自國語を以てやつて行くには、外國人が日本語を解しなければいけない、外國人に日本語を習はせるには日本語を羅馬字で書き表はすことにするより他に方法はない。

番に自分の論説や用向を直接に外國人に告げ知らせる場合のみではな  
い、現在のやうに、日本の輿論を代表する新聞雜誌の類が大抵の外國人  
に讀めない漢字や假名で書いて出るのは、外國の人は翻譯等によつて  
之を間接に知るの他に方法がない、日本へ視察に来る外國人でさへ、二  
三の外字新聞に摘載したもの、ほか、日本の社會の耳目たり發表者たる  
新聞雜誌に載て居ることが解らない。日本の新聞雜誌のことを直接に知  
り得ければ漢字や假名を習へばよいではないかと、澄して居てもよいや  
うなもの、實際一通りの外國人が漢字を習ふことは、まあ不可能のこ  
とであるから、輿論の發表法が此の如くであるのはつまり一種の鎖國で  
あると云てよい。一體我國は維新以來開國の方針で現在の盛運になつて  
居ることを考へても、又今後日本が萬般のこととて世界各國と關係が密に  
なることを考へても、此の如く社會の輿論を代表する機關が事實上鎖國



的になつて居るのは、決して世界の大舞臺に於ける日本の地位を高める  
所以てはあるまい、世界的日本の新聞雑誌は、卒先して論說意見を羅馬  
字の日本文で出し、世界の識者に、一は日本語を習はせ一は日本の輿論  
を直接に知らしめるやうにせねばならない。

上のやうに、何れの方面から見ても、羅馬字で日本語を表はすやうにす  
ることが必要であることは明白であるのに、現今の多くの人士がそれを  
決行しないのは、一つは上のやうな要なる事理を考へ付かなかつたのも  
あらう、又一つは自分が幼少から多くの骨折と時間とを費して學び得た  
漢字を捨てるのが惜しいといふ決斷心の乏しいのと、一つは慣れたもの  
を捨て、慣れないものを使ふ爲の當座の不便を忍ぶ忍耐力の欠乏と、此

の三通りかと思ふ。

尤も今直ぐに吾も人も何事にも羅馬字を使はうとしても、中々工合がよ  
く行かない、初のうちは、之を書くのは勿論、讀むのにも中々骨が折れる  
から、初のうちは辛抱が必要である、又羅馬字で書いても、日本文の文體  
や、同意義に使ふ單語が、今ある様に甚だ區々になつて居ては、西洋人に  
それを學ばせるとはどうしてもむづかしいから、羅馬字には適當のさま  
つた文體單語を使ふと云ふとせねばならない。就中、漢字を使ふ日本  
文のやうに漢字の熟語を人々勝手に臨時に製造するやうなことは止め  
ねばならない、之を救ふの方法は場合に應じて種々あらうと思ふ。凡て  
よく其方法を講じさへすれば、漢字を止めて羅馬字にしては都合がわる

いと人々が考へて居るやうな點が、救はれ得るやうに思ふ、下に段々にそれ等の點に就ても述べやうと思ふ。

要するに、諸々の點を合せ考へた處で、羅馬字にすべしと云ふ論點は、甚だ有力で、且つ他の方法で之に代へることの難かしい性質のものである。羅馬字では不便であると云ふ論點は、淺薄又は姑息な考へであるか、又は適當の法を講じさへすれば救はれ得る様のものである、それ故、眞に國家遠大の計をなす人士は、姑息の論を排し、方法を研究して、日本語を羅馬字で自分も書き人にも書かせ之を世界に擴めることを勉めるべき筈と思ふ。

此外に言語學者杯が、科學的の見地から實用上の利不利を離れて、言

語の表はし方其物の當不當、又は優劣に就て論じて羅馬字がよいと云ふことを主張するのもある。併し私は此第三の論旨には餘り重きを置かない、元來實用の言語の表はし方は科學ではない。言語學に於て言語を表はす方法には、假令言語學者中に定説があり又各音を表はすに定法があつても、それは其學問に従事するもの、問の表はし方で、實用上に於て最も適當な表はし方は必ずしも科學的に最も正當な、又は言語研究者に最も都合のよい表はし方でなくともよい筈である。餘り言語學の學說杯をやかましく云ふと、理論家と實地論者と不得要領の水掛論をするやうになる。學者にはそれ、尤もな理由もあらうけれども、私の考へてはつまる處實用上の事を主にするに歸するの他はな

からう。これと關係した論は、後に綴り方の論の處にも出て来る。それで實用の言語の表し方は、何處までも實地上の利害と便不便とを主にして論ずべきものと思ふから、私は上の如き二通りの點に就て羅馬字の必要を論じた。

## 二、ヘボン氏流の綴り方

羅馬字を正常な日本字とすることに反對する人は種々あるが、中に、羅馬字は外國の字であるから、從來の字を廢して之を採用するのは、日本語を外國化し、日本語の獨立を失ふ所以であると考へる人がある。之は語と字との辨別輕重を知らない論であつて、羅馬字を使つても日本語は少

しも變更を受けないのである。又現在の漢字を使ふ書き方は、無理に支那の字を借りて居るので、前にも云うた所謂當て字杯に至ては、現行法が日本語の書き方として眞に間に合せ的事であることの明瞭な證據である。此方法に比べると、日本語の音を其儘に表はす羅馬字の方が、寧ろ日本語の本體に協て居ると云うて宜しい。

併し右の反對論者の云ふことに一理ある點がある。現在外國人間に多く行はれて居る羅馬字は、外國人が外國人の爲に、日本語の音を書き表はす爲めに定めたものであるから、其書き方は外國語の音の表はし方を基にして居る、即ち外國語流に日本語を書き表はしてある。それ故此方法を吾々が採用すれば、吾々は、自分を先づ外國人の地位に置いて、外國人

の眼孔、否耳に藉りて日本語を表はすやうに、又日本語の書き方を外國人から學んだと云ふやうになる。これでは（下に尙具體的に論ずるが今概言した處で）右の反對論者の云ふやうな嫌があるに相違ない。併しこれは右の外國人間に行はれて居る羅馬字の綴り方が悪いので、羅馬字其者の罪ではない。私等同志の者が使つて居る綴り方（次節に述べる）に従へば、日本語を外國人の見地から書き表はして居ると云ふ嫌がなく、本來の日本語の法則、文法に協ふやうにしてあるから、日本人の日本語として世界に持ち出して至當適切である。

尤も、若し右の外國語流の書き方なるものが、英獨佛其他凡ての羅馬字使用の語法に共通な萬國のものならば、強いて之を避けて日本人流の

考へを主とするやうにするのは、餘り了簡の狭い頑固論のやうで、又本來の羅馬字使用の目的に對して考へものであるかも知れないが、幸にして、今外國人間に使はれて居る書き方の中で、日本流でない所は、實際に當つて居ないものか、左もなければ萬國的でない所で、英語の發音には協つて居るけれども、佛獨語には協つて居ないと云ふならな所であるから、之を改めて日本流にした處で、世界的の眼孔から見て頑固偏見等の誹を受けない理である。

次に右の異同の點をモット具體的に述べやう。上に、今外國人間に多く使はれて居ると云うた綴り方は、又ヘボン氏以來多くの和英字書に使つ

てあるもので(以下へボン流と云はう)、母音は伊太利、獨乙の如く、子音は英の如くに響かすもの、即ちカサタナハマヤラワガザダバの諸行に對して大體に於ては k. s. t. n. h. m. y. r. w. g. z. d. b. p. を使ふけれども、シチツフジヂツに除外例を設けて、之を shi. chi. tsu. fu. ji. ji. zu. 又は dzu. と書くのである。

(一) 或人々は右の綴り方が正しく日本語の音を表はす唯一の綴り方のやうに思つて居るやうであるが、さうでない。

右の除外例に使つてある綴りの中の子音のうちで、f は英獨佛等の國語に於て同様に發音せられるであらうが、他の sh ch ts j z dz は英語の外の語に於て缺けて居るか、又は異なる音に發音せられて居る、特に chi は英

なればこそチであれ、佛語ではシ、獨語ではヒ、伊太利語ではキである。それ故、へボン流の綴り方を外國人に合點させやうとするには、子音の音は英語の如くであることを特に云はねばならない。日本人自身に對しても、既に從來の五十音圖及び文法に關する規則の規則正しいことを捨て、上のやうな除外例を使ふ以上は、やはり「英語の如くに子音を使ふから、シは shi チは chi、等にする」と云はねば合點が出来まい。これは上に述べたやうに、日本語を外國の語を基として表はすことになるの點からも不都合であるが、今假に此點をかまはないとして考へるに、兎に角日本語の子音が英語の發音によると定めることになる。それが果して正しいかと云ふに、さうでない。例へばシは英の shi と大分違て居て、實際に於

て寧ろ英の si に近いと云て居る人もあり。又日本人中には特に英の si のやうに shi を發音して居る人さへもある。之を英の shi のやうに云ふ人は、shi の綴りに誘惑された英學者杯の他には先づあるまい。チは私自身は英の chi と充分よく似て居ると思ふが、丸山通一氏杯は英で tsi と書くべき音と同じであると云ひ、且つ氏自身は實際其様に（チを英の tsi と）發音して居る。フは、人及び地方に依て色々であらうけれども、英の眞の fu の如く發音する人は恐らくあるまい。字によつて、英の hu のやうに云ふ人はあろうが fu のやうに云ふ場合は恐らくあるまい。藤岡勝二氏は現在ハヘボン流を使つて居られるが、雜誌「羅馬字」五號七頁に「奮發」を humpatsu と書かれたのは印刷の誤植ではなく、其音が實際 h の方であるから、知

らず識らずそう書かれたかと想像する。一體、fu は上齒と下唇とを寄せて發するし、hu は兩唇を廣く開いて發する、而してフは通常兩唇を可なり狭くして發する。英の hu を云ふ位置から兩唇を段々に狭くして行けば、段々に凡ての階級を経て日本のフになる、而して此等の諸の階級の音は人及び語によつて（右の「奮發」でも、他の語でも）實際に使はれて居るから、其間に境を指示することが出来ない。之に反して、日本のフから英の fu に持つて行かうとすれば、上齒が關係する處で可なり判然たる境があり、又此中間の音は自然的でない、少くとも吾々は實際にフと fu との中間の音を出すことはない（これは fu の音が日本語に成立しないの故、當り前のことである）。之に依て見れば假令フが通常英の hu でも fu で

もなくとも、それが種々の程度に hu に近づくと、場合があるが爲に之と離すことが出来ない」と云ふ點から、fu よりは hu で表はすを至當と思ふ。それ故、ヘボン流は英語を助に假りて日本語の音を表はすのに正しくはない。英語を假りないで、單に日本語を彼の如く書くと云ふには sh ch 等の子音は餘り複雑に過ぎる。

(二) 又或人はヘボン流は假令完全なものでなくとも、現に行はれて居るから其儘に之を擴めるのが羅馬字を廣く使ふと云ふ目的に適して居ると云ふ、併し私はそう思はない。一體あの綴り方は今迄使はれて居る唯一の方法ではない。先年田中館教授が出された理科大學紀要の日本磁力測量の大冊の論文は向後隨分學術界に引合に出されるに相違ないと思

ふが、それには日本の地名人名を他の方法で綴てある。又現今羅馬字熱心家と云うてよい人達は「羅馬字ひろめ會」の維持會員であらう、其人達は月々金を持ち出して「羅馬字」と云ふ雜誌を發行して居られるが、其綴り方は決して皆右のヘボン流ではない、種々雑多の書き方がある。又先年文部省の案として出したのもちがうて居る。論者は又ヘボン流は此迄あつた唯一の綴り方でなくとも、最多數の人が用ひて居る方法であると思ふかも知れない。是は右の雜誌「羅馬字」の面で見れば、決して當ては居ないが、假に大負に負けて、比較的多數だとしても、それがどれ丈の人に用ひられて居るかと思ふに、本當にそれを使て居る人は、多分在日本の外國人中の極少數のもの位であらう、其外には和英字書を引く時丈それ

を使って居る學生位のものであらう。私等の考へて居るのは、茲に羅馬字の日本語を一定して世界に持ち出さうと云ふので、又内に於ては漢字を廢して羅馬字にしやうとさへ云ふので、其區域は現代の人丈でも日本人五千萬、本國に居る外國人數億の人である、それに限りなき我が日本國の將來の時間に乗じたならば、現にそれを使って居る人杯のことは、とても勘定に入るものではない、數學で云ふインフニテシマル(0)である、そんなことに拘泥して居ては到底立派なこととは出來ない。  
尚一步を進めて云へば、ポン流の目的は、私等の目的として居る處と丸で違ふ。彼は日本語の正式の書き方には無關係に、只傍から外國人自己流に日本語を寫すことを目的として居る、故に假令上に云うたやうな相

違があつても、日本語を眞似する方法として先づ一通りは目的に協うて居る良い方法であると云つてもよからう。若し日本人がどこ迄も漢字と假名で書いたものゝみを以て正式の日本語と見做し、羅馬字をば外國人任せとして他人扱ひにしてやり通せるならば、右のやうに外國人の考へ及び耳を基とした書法を、引續て使ふも或はよいかも知れない。これさへも、日本語が常に羅馬字の形を以て世界に知られるものと考へると、外國人の考へ及び耳を基とした、(少くも書いた形に於て)不具にされた日本語、勝手に變物にされた日本文法が、日本語、日本文法として世界に知られるのは、私には愉快に感じられない、况や私等の目的は外國人の眞似用の羅馬字、他人扱ひにすべき羅馬字ではなく、日本語の正當な書



き方として(假令一時に漢字假名の現行法を放逐して唯一の正當の書方とはならずとも、少くとも現行法と併用すべき、之と同等に正當と認めらるべき書き方として)羅馬字を定めやうと云ふのであるから、彼書き方と一二の點に於て違ふことのあるは、當然である。特にヘボン流は既に多少擴がつて居るから羅馬字を擴める爲に之を採用するがよいと云ふ論に私は賛成しない、私等の方法は次の節に述べる通りで、小學校の生徒や他の少しも英語を知らないものにも、直に覺えられ且合點されるから、日本人全體に速かに澤山に擴がることは請合ひである。

(三)又或論者は、日本人が向後益々外國語を必要とする、其中で英語を最とする、日本語を書くのに子音を英語流にしたものを使ふのは英語を

習ふのに便利であると云ふ。次節に之と同様な一例に就て述べる點もあるが、今只之を概論するに、これは自分の國語を道具に使て外國語を習はうと云ふやうなもので、其不當なるは云ふ迄もない。

神田男爵は英語に於ける先輩として私の尊重する人である。男爵の著された英語讀本に羅馬字の日本語があるのはどう云ふ趣意であるか知らぬが、若し之が和文英譯の材料の和文として出されたのならば、即ち單に普通の漢字を使ふ方法の代りに出されたのならば、私は大に之に賛成する、獨逸人に對する英語の教科書に、英譯すべき獨文、獨譯すべき英文等が列て居るのと同様である。此二的には日本語の綴り方が英語流になつて居る必要がなく、且つ英語流になつて居ない方が、日本語と英語

との差違を外形に於ても示す所以になるから面白い。即ち獨逸人に對する英語の教科書に於て、獨逸語の綴り方を英語の發音の法則に従ふやうに改めるが如きことをしないと同じことである。若し著者の意がそうではなく、彼羅馬字を英語の發音を習ふ爲の目的に供するのであるならば、私は、甚だ不賛成である。其故は、あれを習はせるのは、やがて、自國語の日本語を外國人的に書くことを習はせるのであるからである。或人は英語を教へる方便として、羅馬字の日本語を教へるのは、却て英語の發音を悪くするからいけないと云ふが、元來英語と日本語とは根本的に發音の法が違ふから（雜誌「羅馬字」第六號「日本式羅馬字」第三、四節）此説は有理であると思ふ、生中羅馬字を外形に於て似寄せせるが爲

に、却て本目的の英語の發音を壞すことになる。若し英語の發音を壞さないやうに羅馬字を教へやうとすれば、羅馬字文を、日本語のよく出來ない英國人が讀むやうな風に讀て、即ち日本語を態々日本語らしくない様に讀て教へなければならぬ。これは如何なる英語の教師も出來兼ねるであらう、又假令出來ても、私には好ましくなく思はれる。此様な點に於ても、寧ろ日本語の羅馬字には、初めから英語と關係のない、全く日本流の綴り方を使ふ方が弊が少なからう、これにすれば眞正の日本音として之を讀て、少しの憚る處もない。

兎に角若し神田氏の書の如く廣く行はれて居る英語の讀本に、日本語を、英人が自己流に寫したのを眞似たと云ふ嫌のある書き方でなく、次

節に述べるやうに日本人の習慣と考へ方とに従ふやうな方法で書かれ  
 たならば、羅馬字で書いた日本語が、英語に頼て居る寄生植物のやうな  
 形てなく、英語、佛蘭西語、獨逸語等と相並て自己の特性を有する獨立の  
 國語と云ふ形を備へるから、嘗に外國人關係の小區域に限られず、廣く  
 日本人全體の間に使はれることになるであらうと思ふ。

### 三、日本式羅馬字の綴り方

日本語を羅馬字で表はすに、外國語を基とせず、日本流の考を基とす  
 ると云ふのは、決して日露戰爭で勝た等のことから起た自尊的の考から  
 ではない。一つは實際の日本語を表はす方法として正當であると云ふ

考、一つは此方法を取れば日本人全體に羅馬字書き方を承認せられて、  
 從て羅馬字が我國民中に最もよく擴まると云ふ考と、モ一ツは此方法を  
 取れば日本語の文法が從來の邦字の日本語文法の通りに規則正しく、特  
 に羅馬字で表はす爲に簡單になつて（下を見い）外國人が日本語を學ぶ  
 にも便になると云ふことと、此の三通りの實地上の便利を主として云ふ  
 のである。此便利を得る爲に失ふ處は、只外國人に對して三四の綴りの  
 發音の特點を指示するを要する丈である。

一體、日本語の正當な發音は、何れの綴り方を使ふにせよ、歐洲語と根  
 本的に違ふから、外國人が正しく之を習ふのには随分澤山の困難に打  
 勝たねばならない、中で最も困難なのは、アクセントなしの語、ンの處

とつまる處とに時間を置くこと等であらう。是等はどうしても特別に習はねばならぬものであるが、それに比べると、三四の綴りの読み方の特例は何程の骨折りもない。又左程正しき發音を知ることがを要しない人、(日本に來て又は本國に居て羅馬字で書いた新聞雜誌の論文杯を讀むを目的とする外國人)は、此等の特例を凡て注意せずに、各々自己流に讀んで居ても少しも差支へない。

日本人が從來音を表はす爲めに用ひ來て居る假名を學ぶに、イロハ歌と五十音とあるが、其イロハ歌に於ける音の順序配列が文法上何等の關係もないことは明であるが、五十音の配列の方は、或論者の云ふやうに、果して日本語に對して價值無しのものであらうか。あれは言語學上で科學

的に全く規則正しいものではあるまいが、私は、第一節の終りに云うた通り、日用の言語の表はし方は科學的の正否よりも、實用上の便不便によつて定まるべきものと思ふから、其點を考へて見るに、日本語の音の實用上の關係に於ては、五十音配列は全く規則正しいもので、此關係を表はすに最も簡便明瞭な書き方が最も善い書き方であると思ふ。私等が世人が皆使つてほしいと思ふ書き方は、五十音の各行に各一定の

子音 k. s. t. n. h. m. y. r. w. g. z. d. b. p. を使ひ(本書第10頁)、キヤキユキヨ、シャシヨシヨ、チャチュチヨ等及びクワグワの拗音には初の音を表はす子音 k. s. t. 等へ ya yu yo 及び wa を添へる(本書第17頁)のであつて、これなれば、五十音配列の關係が簡便明瞭に外形に表はれて、丁度右に云ふ處に協ふ。

次に五十音配列の規則正しいといふ所以、及び右の綴り方の便利適切な  
 第一に、吾々日本人は、漢字の字書を引いて、何々の反切とあるのによつ  
 て漢音を發音するに、全く五十音の配列に従て、其サ行タ行ハ行等に何  
 等の不規則なことがあることをも感じて居ない、即ち五十音の配列は日  
 本人が（科學者としてにあらず、單に日本語を話す日本人として）實際に  
 規則正しいと考へて居るものである。  
 第二に、日本文典を見るに、書く、押す、打つ、汲む等は、皆同じく四段  
 （俗語格では五段）活用の動詞として五十音圖上にて全く規則正しく用  
 ひられ、少しも其間に規則の違ふことを認めない、今之を羅馬字にして、

例へば

書かぬ	kak-anai	汲まぬ	kum-anai
書き出す	kak-i-(dasu)	汲み出す	kum-i-(dasu)
書く	kak-u	汲む	kum-u
書けば	kak-eba	汲めば	kum-eba
書かう	kak-ō	汲まう	kum-ō

に對して、サ行タ行にも各一定の子音s,tを用ひ、

押さぬ	os-anai	打ちぬ	ut-anai
押し出す	os-i-(dasu)	打ち出す	ut-i-dasu
押す	os-u	打つ	ut-u

とすれば特に善く凡てが同一の規則で行くことが知れる。即ち kak, kum, os, ut, 云ふ根に anai, i, u, eba, o を添へると云ふ一の法則で済むから、今迄假名を使つた爲に、五十音圖を借りて廻り遠く説明した法則が、簡潔に言ひ表はされると云ふ利益が尙加はつたのみである。之に反してヘボン流を以て

書	び	ば	os-eba	打	て	ば	ut-eba
書	び	う	os-ô	打	た	う	ut-ô
{ os-anai osh-i-(dasu) os-u, 等				{ ut-anai uch-i-(dasu) uts-u, 等			

になると云へば、共通の語尾を付ける前にサ行タ行に特別なる根の變化を行はねばならない。これは只面倒だと云ふのみではない、從來の日本文法には右の四語は全く同等に取扱はれて居ることを考へて見ると、單に羅馬字で書くと云ふのみの故に、今迄同一の規則で行て居る動詞が同一の規則では行かなくなる、今迄區別を立てなかつたものに區別を立てることになる、これは決して至當なことではあるまい。

- 字音動詞の活用でも同様で、私等の書き方であれば、例へば
- 對する 對して taisuru, taisite
  - 勉強する 勉強して benkyôsuru, benkyôsite
  - 論ずる 論じて ronzururu, ronzite

の如く同じs、zを保存して、其後のmuかnoになるから、是迄の文法でサ行、ザ行で働くと云ふことに當る。之をへホン流にして

taisuru,            taishite  
ronzuru,            ronjite

と活かせれば、子音迄もsがshになり、zがjになる杯云て、丸て變てしまふ。

第三に、日本語には、音便の爲に(特に組立て語に於て)、音が變ることが甚だ多い。多くは清音が之に對する濁音(又は半濁音)になるのである。これは外國語には多くないことであるから、其規則の簡單なると複雑なるとは外國人杯には大に利害の關する處と思ふ。

次の例などは、此點に就て、綴方の長短を比較するに屈強である。

日本流

へホン流

酒、白酒、	Sake, Siro-zake	Sake, Shiro-zake
鹿、牝鹿、	Sika, Me-zika	Shika, Me-jika
墨、朱墨、	Sumi, Syu-zumi	Sumi, Shu-zumi
寫眞、色寫眞、	Syasin, Iro-zyasin	Sheshin, Iro-jashin
繻子、黒繻子、	Syusu, Kuro-zyusu	Shusu, Kuro-usu
玉、赤玉、	Tama, Aka dama	Tama, Aka-dama
近、手近、	Tikai, Te-dikai	Chikai, Te-jikai
連れ、道連れ、	Ture, Miti-dure	Tsure, Michi-zure

茶屋、一軒茶屋、 Tyaya, Iken-dyaya Chaya, Iken-jaya  
 調子、本調子、 Tyōsi, Hon-dyōsi Chōshi, Hon-jōshi

私等の書き方では、是迄の文法で、サ行がザ行に、タ行がダ行になると云ふに對して、sがzになり、tがdになると云ふので盡して居る。之をへボン流にすると、sとtsがzに、tがdに、chとshとがjになると云ふ五通りの複雑な規則になつて、其上、zとjとを持て居る組立語が書いてあつても元の語が解らないことがある。例へば外國人がへボン流で *chizure* と云ふ字に出逢て、之を知らないで、字引に此の語がなかつた場合に、組立語だらうと勘付いても、「道すれ」か「道つれ」か解らない。Irojashin の jashin が chashin か shashin か解らなうの類である。複

雑で覺えにくくして、おまけに用が足りないとは氣の利かない話である。(ジヂ、ズヅ、ジャヂヤ等が實際談話の節にも多數の日本人には區別されなから、上の様な區別が出来ない方が正當であらうと云ふ論が多分あるであらうが、之に就ては次の節に論ずることがある)。

これと同様のことが、フをhuで表はす方が適當であること他の理由になる。即ち音便の變化に於て、フの子音が全くハ行の他の音の子音と同様に行く、

齒、入齒	Ha, Ire-ba	}	hがbになる
火、焚火	Hi, Taki-bi		
麩、饅頭	Hu, Sudare-bu		



日、天日	Hi, Ten-pi
夫、凡夫	Hu, Ban-pu
步、散步	Ho, San-po

h が p になる

此等の場合に h と f と二つ子音を設けて、それ等が同様に變つて行くと云ふよりは、凡てが同じ h であるから、同様に行くのではあるまいか、少くとも左様に云ふ方が適切便利ではあるまいか、**之を以て見れば、五十音圖は日本人が實際上に使うて居る音の關係を規則正しく表はして居るものと云ふべきもので、其各行に一定の子音々使へば、此事實が直接外形に表はれて、文法上其他の諸音の關係に關する法則が上の例に見るが如く、便利簡單になり、此迄の日本文法が其儘行**

はれることになる。  
又、日本人が日本語の正式な書き方として使ふものは、外國語の感化を受けない日本人が合點するやうな綴り方である筈であつて、日本人が既に一般に五十音配列を知て居り、且つ日本語の諸規則が之に依て調のへられて居る以上は、へボン流の如く此配列を不規則にするものは、日本人全體から承認せられる資格に乏しいと思ふ。拗音の子音の如きも同様で、試に外國語の感化を受けない、日本語文を知て居る日本人に、五十音の各行に k s t 等の子音を配することを教へたならば、拗音を私等の書き方の如く表はすことは直に合點せられるであらう。それをへボン流に、キヤ、ミヤは kya, mya と書くが、シャ、チャは sha, cha と書くと言ふたならば、

合點し兼ねて、「假名で書けば一樣に行て居るものを何故に羅馬字で書く爲にそんな理の分らない區別をするか」と云ふに相違ない。要するに私はヘボン流の綴り方が日本人間に一般に承認せられて擴まるのは適しないと信ずる。

これは一般の日本人に對する點から云ふのであるが、私等の書き方は、上の第二第三に述べたやうに、文法上の法則を整一簡單にする所以になるから、*syatya* がヘボン流の *shacha* 等と違て英語其他に於て見馴れない形であるに拘らず、外國人の日本語を學ぶものに對しても、却て便利を進めるわけになる。

つまり、私等の綴り方に從へば、日本人に羅馬字を擴めることも出來、

日本語の此迄の文法法則が保存され、世界に於て英佛獨語等が發音や文法が相互に違て居て獨立の成立を持つて居ると同様に日本語が獨立して存在することになり、其上外國人が日本語を習ふのに却て便益を得る即ち日本語が世界に擴まり易い、この性質あるものは無論最も正常な羅馬字書き方であるまいか。そして私は上のやうに、五十音圖と是迄の假名の表はし方に協ふやうに決めた綴り方を「日本式羅馬字」と稱へやうと思ふ。但し此綴り方は今私が一人初めて言ひ出すと云ふやうな方法ではない、二十年前に發行されて居た「羅馬字新誌」と云ふ雜誌に用ひたものであつて、又前に出した田中館教授の論文の中の綴り方である。

書き方を右の如くしては、外國人は例へば ti とあるを我チと發音はすまいから、無論其發音の方法を説明せねばならない。これは至て簡單で、「日本語では ti di を英の chi ji のやうに、tu du を英の tsu dsu のやうに、si zi を英の si zi と shi zhi との中間の音のやうに發音する」等と説明すればよい。外國語の(ティ、ト、ハ、杯と書くべき) ti tu でさへ、可なり多くの日本人がチツと發音する。Mathematik をマテマチック、two をツの類(特に注意せず自國語的に云ふ時)は五十音圖の如き排列に關係しなくとも、自然にカキク三音の關係とタチツ三音の關係とを同一に見、且つ實行して居ることの證據であらう、然らば「日本語にて ti が英の chi の如く響く」と云ふは正當であらうと思ふ。

「勿論、私は獨逸語英語の Mathematik two をマテマチック、ツと發音してよいとは云はない、これは獨逸語英語である故に獨逸語英語のやうに發音せねばならない。上に云ふのは、日本人が此種の外國語を多少日本化して自國流にすれば、ti tu をチツに發音する傾があると云ふことの證とするのみである。若し此種の語が將來、現在のランプ、ミルク、オムレツの如くに日本語になつてしまふならば、日本語としては無論マテマチックの如くて差支ない。」

論者には、ti をチと讀ませると、英語杯を教へるときに、ti の發音に大に障害を及ぼすからいけないと云ふ人があるが、こんなことは、考へ方とやり方とでどうでも云へるものである。現在は、ti をチと發音するさ

まりが何處にも無いのに、上の如く日本人中には外國の ti をチと發音する人があるのだから、此外國音の發音の誤りは日本のチを ti と書くことを避けても消えるものではない。又日本語で ti をチと讀むことに定めて置いて、「英語の ti は日本語の ti とは音が違ふぞ」と、當初に言ひ聞かせれば、却て上の様な誤を避けるのに有効であるだらうとも云へる。又外國語の ti を讀むに差支へる爲に日本語で之をチと讀むことを遠慮すべきならば、獨乙の chi (ヒ)、佛の chi (シ) を讀むに差支へるから、チを chi と書くとは無論いけないことになる。

論者には又、日本文の中で ti をチと讀ませるならば、外國の ti (テイ) をどうして書き表はすかと反問する人がある。是は善く聞く迂遠な説であ

る。と云ふ理は、ti (テイ) は日本語にはない外國音である以上は、之と同資格の音は諸の外國語の音中にいくらでもある、ti (テイ) を羅馬字で表はし得べき方法を設けて置くべきならば、此等の諸音——母音では英の man, cat 等の a, not, of の o、子音で獨逸の ch や g、又佛の en, un pain 等の鼻音等——を表はす音を設けずばなるまい、随分大變なことになつて来る。其必要がないとすれば、獨り ti (テイ) のみをひいきにして之を書き表はせる方法を設ける必要はあるまい。こんな音を表はしたい時には「英の ti」、「佛の en, un」、「獨の ch」杯と云ふがよい。

又、特に英學者杯の中には、「羅馬字で ti と書いてあるものをチと發音しては外國人に聞かれても耻かしい」と云ふ人が恐らく尠くあるまい。

こういふ連中は、多分シを英語の本當の shi のやうに、オコントノ等の音を not, of 杯の o の音のやうに、横濱を Yokohama、大阪を Osaka と讀まねば外國人に笑はれるだらうと思ひ、凡て日本語の發音を外國人から習はうとするハイカラ連であらう。同じ chi と書いてあるものを英ではチ、獨ではヒ、佛ではシ、伊ではキと讀む位に違ふのだから、ti を日本語ではチと發音すると云うて何の耻かしいことがあらう、况やこれが、上にも云うた通り、日本人の自然の發音であるものを。

尙茲に、特に、羅馬字書方に注意する人に對して、日本式羅馬字の安全なる點を言て置き度く思ふ。一體羅馬字綴り方は、上に述べた通り、人々て

随分色々あつて、各理由を持って居るであらうから、眞に結着の最良の方法と凡ての人が一致するやうな方法を定めることは容易でない。實際、論者が甲の點を主に考へて居て乙の點に氣着かずに居る事が多いから、理屈の上を考へて居ては、決して間違のないと請合はれる判断を下すことは困難である。

現在の假名遣にも似寄つた例がある。じとぢ、ずとづとの區別をなくするなどの案があつても、慎重なる文部省ならば中々全體の實際の社會にそれを強ひることは出来る筈がない。且又實際の社會では（新聞紙の振假名を見ても解る通り）舊の通りにやつて居る。

日本式羅馬字の綴り方は現に日本語を日本人が書き表はして居る通り



ではこちら流に綴ると云ふ主義であるが、私は當人が特別に望む場合には當人の望む綴り方に従てよからうと思ふ、即ち名の綴り方については當人の優先権を認めてもよからうと思ふ。

又外國語の綴り方は、それが既に日本語同様になつて居て、書く當人が外國語と思はずに書く時には、日本流に綴てよからう、Ranpu, Ramine, Inki, Mirukuの類、併しそれが外國語と感ぜられて書いてある時には、外國語の儘に書くが適當であらう。學術上の語括は多くは此方に屬するかと思ふ。例へば火山から出る溶けた岩は Lava と書くの他はあるまい。

外國の人名は原の通りに綴るべきは勿論であるが、地名はヨーロッパ

イギリス等の例があるから、凡て原の通りとはどうしてもいけなす。よく考へて見るに、此様に日本特別の名前の付いて居るのは、五大洲及び要用的な國の名丈で、山川都府等はいつても成るべく原名に近いやうに云て居るに相違ない。それで今私の適當と考へて居る書き方は、五大洲及び國名は日本流にしてよい、都府山川は原の通りにすると云ふのである。但し國名括でも原の通りの書き方を使ひ度い人はそう書いても宜しい。例へば Igrisu, Doitu, Huransu (又は France), London (Rondon とは書かなす) Paris, New York 等。

●● 追記。或人々は、ツ列の音を寫すとき、場處によつて、クを K、スを S、

等の如く、母音 u を省いて書く。複雑を *Fukzats*、既に *sdeni*、あり  
ますを *arimas* の類。其理由は其處には實際 u の母音が發音されない  
からと云ふのである。私が此法を賛成しない理由が二段にある。  
第一は、右の人々の u を省かれる場合の多くに於ては、u が假令充分  
には聞えないにしても、ないとはない、(所謂 *obscure* の) 弱音になつて  
居るので、外國人が u なしに書いたのを發音するのを聞けば、日本人が  
其日本語を云ふのとは大に違ふのである。即ち u がないと思ふのが多  
くの場合に誤であると云ふのが第一段の理由。  
第二には、假令或少數の場合に於て、u が實際ないやうに發音されて  
居ても、それは急いで *どんどん* に言ふと云ふやうな爲で、吾々が聞き直

て丁寧と同じ文句を言ふときは、必ず u を入れて各の綴りを捨て行く  
やうに讀む。又其文句が歌の文句であるやうな心持で讀めば必ずさうな  
る。故に正常な言ひ方、従つて正常な書き方は、兎に角皆 u の入つて居  
るものであると云てよい。それ故、「特に對話文を詠りや何かまで盡く精  
密に言ふ通りに寫すと云ふやうな特別な目的がある時には、實際に u の  
あるなしに従て之を書き又は省いて勿論善いけれども」、特別に對話の  
通りを寫すと云ふやうな目的がない場合、普通の記事論説では各語を正  
常な書き方に従て、皆 u を添へて書くがよい。各讀者がそれを u なし  
に讀むと否とは問はなくともよい。これが私の第二段の理由である。  
又右の如く書く論者中には、發音の實際 u 音の存否に關せず、「k s



七等を日本假名のク、スツ等と全く同等の符號ときめれば他に論がない」と云ふ人もあるが、これは根本的に羅馬字の世界的性質を變へるもので、それでは吾々が羅馬字を使ふ目的の多分を失ふわけになると思ふから、私は之には全然不賛成である。

#### 四、羅馬字と假名違ひ

先年來文部省並に或種の學者の中では、假名遣を或標準の社會に於ける常用語に據て簡單にする方針らしく見える。勿論之には言語學上の理由もあるであらうが、第一、標準の現用の語と云ふものが曖昧なる定義のものかと思はれる、東京人が觀音をカンノンと云ふからカを正しいとす

ると云ふことは、それ自身に於て如何あらうかと思はれる。日本國民全體又は大多數がそれを認める迄は、此の如きことは元の規則を正しとして置くべきものかと思ふ。

これは只其の事柄自身の方から見て云ふことであるが、別に實際上の便宜の點から云へば、凡て發音は成るべく多くの區別を正しくした方が便宜である、つまりそれだけの音の上の單語が増し、誤解が少くなる筈と思ふ。カク、杯の差で誤解を起すやうな場合は随分あるやうに思ふ。例へば「日本のカソク制度が云々」杯聞いて家族制度のと思つて聞いて居ると華族制度のとであつたりする。此種の音を多くの地方で區別しなくなつたのは、假名遣ひ及び發音の教授を等閑に附した爲ではあるまいか。

私の臆測では、今迄假名遣ひ及び發音の教授を一般に等閑に附したことの原因は、漢字にあるかと思ふ、漢字を見て居れば、假名の必要がない、談話中でさへも漢音で不明瞭のことがあれば、其訓を以て説明するか、又は何扁に何と云ふ字と云うて、説明すると云ふ奇觀があつて、兎に角それで濟て居た。漢字を主にしてそれに振假名を付けるから、カン、ク、ンの區別は肝要でなくて、うるさいから此區別を無視しやう、抔と云ふことになるやうに思はれる。私自身は東北の生れて、元來こんな區別に不得手の方であるけれども、區別をすることが、實際上意味を明瞭にするのに便宜であると感じて居る、若し漢字を使はないやうにでもなるならば、人々が此種の區別の必要を直接に感ずるであらうと思ふ。それで

私は彼の如き區別は便宜上からも保存して置き且つ成るべく正しく教授され度いと思ふ。  
羅馬字を使ふとになると、無論漢字を傍に書かないから、今云うたやうな區別をすることが實地上便利を得る所以になるから、成るべくそれを正しく致したい。かく考へれば、羅馬字と、從來の正しいと考へられて居る日本語の發音及び假名遣ひとは、互に助け合ひ互に利益して行くべき等のものかと思はれる。  
勿論こゝに假名遣ひと云ふのは、正しい假名遣の通りに羅馬字で書いて發音の誤りを生じない場合のみについて云ふ。例へばワ、イ、ウ等と響くハ、ヒ、フ等は ha、hi、hu とは書かない、これ等は矢張 wa、i、u 抔と書く。

井エも實際イエと同じに響く時はieと書く。又方法の如きはHohōと書く。茲に云ふのは上にも掲げたkwaとkwa、siとsyuの如き區別、並にジとヂ、ズとヅを區別する等の意である。例へば

貝	Ki	會	Kwai
字句	Ziku	新宿	Sinzyuku
自身	Zisin	地震	D'sin
悪強ひ	Waruzii	猿智恵	Sarudie
三色刷り	Sansyokuzuri	二本釣り	Nihonduri 等

或論者は言語で區別しない音を字で區別する必要がある筈はない杯と云ふ、又言ふ通りに書くことが言語學者の定論かも知れない。けれども

それはまだ考が足りないと思ふ。若し人の言ふ通りを凡て書けるならば、それはよいかも知れないが、さうはいかない、話の中の緩急、抑揚は勿論、上下さへも字に顯はさないのだから、話して分ることは書いても分る筈であると言ふ議論は論理に合はない。書く方に緩急抑揚等の利器がない代り、話の方で存在しない點でも意味を明瞭にするに助になることは何でも成るべく利用して使はねばならない筈と思ふ。それで、ジヂ、ズヅの區別などは、假令在來の假名遣ひの規則を無視し、又四國邊の人が實際それを區別して發音して居ることを無視しても、尙ほ字の上のみでも區別を保存して置くことは有益である。

又或論者は、多くの人が現在區別して居ない音を區別して書くことは、

書くときに考へねばならなくて、面倒だと云ふてあらうが、これは漢字を主にして羅馬字を其場限りのものと考へるからのこととて、若し羅馬字を主にして読み書きをして居れば、例へば地震はいつも *Disin* と云ふ字で目に慣れるから、二三度かけばもう自然 *Disin* と書いて、間違はうとしても *Disin* とは書けなくなる。又、上の「悪強ひ」「猿智慧」杯の例でシヒ、チエから組立てられたことを表はす上に於て、上の様な區別をすれば、*シチ* 共に *シ* で表はす他流よりは遙に正當であると思ふ。

*ジチ* 杯の區別は、上に云ふやうな直接の正否、便不便の點の外、尙大きな教育上の利益を生ずる。一體日本人は音を聞き分け、言ひ分ける能力が一般に弱いやうに思はれる、右のカ、ク、ジ、チ等を混ずるのは其手近の

證據である。かう云ふ能力を發達させるのは、教育上の要なる事業かと思ふ。幸にカ、ク、ジ、チ等の區別は、尙日本人中可なり多くの人に残て居るのであるから、成るべく之を擴げ、發達させて行くがよい。此の如き音の識別の能力は、特に外國語を學ぶものゝ爲に要用である。例へば佛語の *j* と英語の *j* の區別は、専門家の精密な比較ではどうか知らないけれども、丁度 *ジ* と *チ* との區別に當るやうに思はれる。

上には *ジチ*、*ズツ* 等の區別の問題自身に就て論じたが、尙他に、差當ての實行問題から見て、區別を潰さない方が適當だと考へるべき理由がある、即ち此等の區別が假に到底潰すべきものであるかも知れないとした處で、其問題は中々急には決定することが出来ない。文部省の取極め

て小學校邊の教科書では紅葉をモミジと書いても、新聞雜誌、其他文學の書は矢張モミヂで進て行くであらう。即ち此問題が決する迄は實際の社會は矢張右の區別を保存して實行して居るに相違ない。羅馬字採用問題を決するのに、右の如く決し難いジヂ、ズツの區別の問題をも併せ考へねばならないと云ふ理由は何もないので、現在の假名書きて假令當分丈でも其區別があるならば、羅馬字の方でも其儘に區別があるものとして置くが當然である。そして右の問題は、羅馬字問題とは關係なく、ゆるく、攻究すべきである。

### 五、名詞の初の字を大文字で書くこと

これも「羅馬字新誌」以來の方法であるが、名詞は多く文中の要用なる語になるから、それを大文字で書くと、要用な字がよく目に付いて、了解に便である、假名交り文に慣れて居る目で假名専用の文を見ると、要領を悟りにくい様に思ふが、羅馬字で名詞に大文字を使ふのは假名交り文の利益の點を大分回復するものと云うてよい。雜誌「羅馬字」四號の七頁に……dokan to to wo akete と云ふ文があるが、「ドカンと戸を……」に見比べると、to to の後の to が物足らなく思ふ。これを……dōkan to To wo akete……と書してあれば餘程見よい。これは特に意地の悪い例を撰び出したからと云ふ人もあるであらうが、單に偶然の例ではない。日本語には、名詞の中に、てにをはや他の短い詞と同じ綴りの詞が澤山にある

輪、和、藻、野、殼、荷、庭、舌(爲た)、谷(他に)の類。又綴りがてにを  
杯と同じでなくとも、餘り短いために小文字で書いては餘り目立たなく  
ててにを杯と同様に眼に映する字は尙更多い。上の例のやうに丁度同  
じ綴りのてにをはと續くと否とに關係なく、かう云ふものを小文字で書  
いては意味を悟り悪いことは夥しい。次に尙二三の例を擧げる。

名詞に大文字を使はない流義

名詞に大文字を使ふ流義

Haru no no no asobi

Haru no No no Asobi 春の野の遊び。

Taihenni ni ni naru

Taihenni Ni ni naru 大變に荷になる。

Okii niwa odoraita

Okii niwa odoraita 大きいには驚いた。

Okii niwa wo mita

Okii Niwa wo mita 大きい庭を見た。

Ima no kara kaetta

Ima No kara kaetta 今野から歸つた。

Ima no kara dasita

Ima no kara dasita 今の(物)から出した。

Ima no kara wo okure

Ima no Kara wo okure 今の空物を御呉れ。

右の例を比較して見れば、名詞を大文字で書くのが見易いと云ふことが  
分るであらうと思ふ。

英語や佛語では名詞に大文字を使はずに濟て居るから、日本語でも其必  
要がなからうと考へる人は多分少くあるまい。上に述べたことで、これ  
が所謂一を知て二を知らない論であることが解ると思ふ。英語では、普  
通に出て来る小さい字 the, a, at, in, on, up, from 杯と同じ綴りの名詞がない  
から、上に見るやうな見悪い場合が起らない。日本文では上のやうな名

詞のある文は殆どいつでも見悪い(てにをはと同様に小文字で書けば)。其れ故名詞を大文字で書くことは、日本語に特別に必要で便利な方法である。此點に就ても、或論者は、言語で區別しない音を字で區別する必要がある筈がないと思ふかと云ふかと思ふが、私の之に對する答は前節に於けると同様で、而かももつと確然と答へることが出来る。即ち、言語に於ては名詞の輪、野、戸等は強く判然と發音せられ、てにをはのは、の、と等は弱く耳立たぬやうに發音せられて、其間の區別がよく解る。故に、書いたものでも、同様の効果が見えるやうな方法を取るのが至當なことで、名詞に大文字を使ふのが、丁度言語で之を際立つ様に云ふのに當て居る。名詞を大文字で書くことの利益は、上のとに止まらない。文を見て意味

を悟ることを助ける上で、折々普通の漢字假名交り文でさへも考へて居なかつた様な便利がある。例へば人と云ふ字は人間の意と他人の意とに使はれる。私は人間の意の人は名詞故 ヒトと書き、他人の意の人は代名詞と同様に見て小文字で ひとと書けば、文を了解するに甚だ便であると思ふ。例へば

Kotowari-naku hito no Mono wo toruna!

Kore wa Hito no Asiato de aru.

ことと云ふ語も、事件の意なれば大文字で書き、と云ふことの意なれば接續詞と見て小文字で書く。

Sore wo mite kita koto (=と云ふこと) wo kikimashita.

Watasi ga mite kita Koto (＝事件) wo mōsimasu.

名詞から出て来た語でも、既に形容詞になつて居るものは、小文字で形容詞の語尾のを附けるがよいやうである。「釜石の鐵の標本」では、鐵は立派な名詞で、その標本であるから、K. no Tetu no Hyōhon、又「シェフィールドの鐵の道具」は「シェフィールドの鐵器」と云ふと同義で、鐵のが形容詞になつて居るから Sheffield no tetuno Dōgu と書く。この様に書けば前の Kamaisi no は鐵の形容句、後の Sheffield no は道具の形容句であることが一目して解る。これも漢字假名交り文で表はし得ない文法上の關係を明に表はして意味を悟り易くする所以である。

## 六、長音の符と音を切る符

假名で書くときには、長音には必ず其れの長いことが符號で表はされてある(う、ふ、ー、何れに拘らず)、之を省くことは決してない。此通り要用なものであるから、羅馬字でも長音には必ず符號を附することに致したい。東京、神戸、大阪を外國人が發音するを聞くと、多く、トキオ (Tokio)、コベ、オサカ (Osaka) と云うて吾々は慣れないと聞き取れない、又先頃盛に賣擴めた大英百科全書の日本の項を開いて見ると、主なる市街の名として Tokyo, Osaka, Kyōto, Kobe, …… 即ち トーキョー、オサカ、キョー、トー、コベ と出してある。(京都は、京都市自身は實際「キョートー」と云ふ



けれども、それは京都人のなまりで、百科全書はそれに依つたわけではあるまい。こんな信用ある大参考書にまで長短の誤りがはいる様では、吾々は餘程氣をつけて之を區別することを常に書き表はさねばなるまい。東京、京都は是非とも Tokyo, Kyōto としてほしい。

長音の符には是迄二つの種類がある、(一)と(へ)である。私は羅馬字では(一)を廢して凡て(へ)にしたいと思ふ。其理由は色々あるが、まづ二通に分れる。

一つは實際の便不便で、(一)は活字杯では通常細くて著しくない。(へ)は(一)よりも形が複雑である丈でもよく目に付く。書體で(一)を書く(ペン)を横に使はなければ線が特に細くて見悪い、且つ急ぐ時杯に棒が

長過ぎることが多く、どの字の上へ付く(一)か不判明になつたり、tの棒と混同連絡して、差別しにくし。(京都の Kyoto も或は誰か、Kyōto と書いたもの棒を次のoの上の横棒と誤認した爲かも知れない)。

も一つは、(へ)は英獨佛邊の書き方では字の必要部分をなす様には使はれて居ない、只發音の長短を示す臨時符號として使はれる。それ故、羅馬字にそれを使つても、書く人は兎角それを略し、讀む人は之を輕視する傾がある様に思ふ。(へ)の方は少くも佛語では、字の必要部分をなして、それのあるのとなひのとは異なる字と取扱はれるから、羅馬字に之を用ひたら、(一)を使ふよりも、それが略せらるべからざるがよく感ぜられるだらうと思ふ。

次に品位、半圓、引用杯の字をヒニ、ハネン、イニコーと讀ませぬ爲の符しは是迄多くは(一)で、Hin-i, Han-en, In-yo など、書してあるが、(一)はこの國でも殆ど全く複成語の結び付けに使はれて居て、日本語にも複成語は随分多く使はれるから、それ等の處と同様の符をこゝに使ふのは面白くないと思ふ。私は其代りに(、)を用ひ度と思ふ、Hin-i, Han-en, in-yo のやうに。最も、(、)は一般に字を略した所に主に用られるので、上に(一)に就て云うたと同種の異議があり得るけれども、一つには(、)の方は他に多く使はれないのと、一つには實際發音の際、此處にて音を切る工合が、何かこゝに抜けて居るやうに感ずるので、感覺上(、)の方がよいやうに思ふ。(日本語では外國語と違て、n が一般に一音の發音

に要する時間を取ることが母音のある綴りと同様であるから、此差を表はす爲に、撥ねる n の後にはいつても(、)を付けてよいかと思ふ程である。併し其次に y 以外の子音が來るときには、誤の恐がないから略して、只次に母音又は y が來る時のみ付けたがよからう。

### 七、羅馬字で書く文體と單語

日本の文體は現在甚だ繁雜である、羅馬字を使つて其内どれでも表はせないことは無論ない、且つ種々の文體を表はして然るべき場合は勿論あるであらうけれども、特別の理由なくして種々の文體を併せ用ひることは、日本人の普通教育の經濟の爲にも、日本語を世界に擴める上に於て

も不得策であらうと思ふ。日本の兒童が、最初に習ふ言文一致體から、漢文體、和文體、手紙の文體、公用文體等を皆習はなくては一通りの用が足りないのは普通教育の大不經濟であらう。又外國人が日本語を學ぶ上から見れば尙更のことである。相應に定まつた文體の外國語を學ぶにさへも、吾々隨分骨が折れるから、外國人が現在のやうに日本語の種類が多いのを皆知らなくては普通の目的に對する日本文が讀めないでは、それを習ふ勇氣が出まいと思ふ。それで私は、特別の目的がある場合の外は、即ち普通の叙事論說等に於ては、一定の文體を使ふやうに致したいと思ふ。

然らば如何なる文體がよいかと云ふに、書冊論文のみであれば、どの文

體を取てもよいわけであるか、日本語を習つた外國人は、又日本へ來て（又は外國に居ても）日本語で話しをすると云ふともあるだらう、此時に全く違ふ文法、文體を改めて學ぶと云ふことは、外國人に取て餘り損なことで、つまり日本語が多く學ばれないことになるから、此點も考へてやらねばならない。そこで、私は通常の叙事論說には、「飾りのない話の文體」(Plain colloquial Japanese)を、**さめて使ひ度い**、即ち之を標準日本文體と致し度いと思ふ。飾りのないと思ふのは、尊敬卑下の分を省いたものと云ふ意で、今私が書いて居るやうなものゝ意である。これであれば、小學兒童が學ぶに容易なることは勿論、文法が割合に簡單で、外國人でも**ぢき**に覺えられる。私は昨年外國から印度洋を経て歸るとき、

船中で英國の婦人と士官と二人に日本語を教へて來たが、最困難なのは尊敬詞で、ち、ご、の添へ語、ございました、居られましたの語法は元よりであるが、單語でも同じ意味の字を見る、御覽なさる(御覽になる)拜見する(拜見いたす)と三様にも五様にも云ふのが實にむづかしい、之を省いて飾なしの俗語にすれば左程の困難はない。そうして、文を讀むのみでなく、話もし得る様になりたいと云ふ人は之を學だ後、對話の實用語(丁寧な話の文體 Polite colloquial)に關することを追加して習ふのは、割にやさしいから、飾りなしの俗語を教へるのは何れの場合に對してもよいことと思ふ。

かやうに飾なしの俗語ときめた處で、まだ随分種々の特別問題が起て來

るであらう、中で最も私が案を得るに苦んだのは命令法である。普通、俗語で尊敬の分子を含て居ない命令法を使ふことは多くないから、をかしく聞える、四段活用の動詞で書け、讀め等は其儘でよいが、見る、起きる、捨てる、來る、勉強するの類に對して、見る、捨てる杯いふのは、論文の中杯に之を書くのに、どうやら卑し過ぎて聞えるので、私は來るの來いに準じて、見、起き、捨て、勉強せいの如く書くことにした、例へば Nan' p. wo mi' のやうに。即ち雅語文體のよがいに變はるのである。一體、飾りなしの話體は、と字で受ける引用法には實地に使はれて居るが、(例へば「花か咲いたと云うて居ます」の類)、右の命令法も「勉強せいと申しました」杯の如く使て見ればをかしくない。

單語、單句に就ても、右と同じ理由で、同様な言ひ表はしがいくつもある時には、其内の一つを標準語として、他は特別の（文學的杯の）理由あるてなければ使はないやうに致したいと思ふ。一二のものに對する私の今の案は本書の96頁第四節以後にある。

### 八、語の切り方のこと

標準單語の選定よりも、羅馬字使用の際、差當て尙難かしい問題は、語の切り方である。これは尙よく實際に當て種々の場合を比較勘考して見なければ、中々確定と云ふ處迄は行きにくい。私が現在切りつけを決する標準として居る點は、文法上で獨立の存在あるものか否かに従つて切

り又は續けると云ふのである。其特別の場合に就ての用例は本書第五章に説明してある。

併し、まだ切てよいか續けてよいか解りにくい場合がいろ／＼出て來るから、尙實地に當て一々研究する必要がある。

こんな研究は、面倒臭いやうではあるけれども、本書中の例でも見える通り、名詞に大文字を使ふことと共に、是迄假名交り文で書き表はし得なかつた區別を書き表はす所以になるから、つまり日本語書き方の進歩になることと思ふ。

そしてかやうな進歩が羅馬字を使ふことによつて達し得られることを考へれば、羅馬字は日本語を書き表はすに假名交り文よりも善い方法で

あると云ふことが出来る。

(終)

附言。 羅馬字廿六文字の名前について

羅馬字廿六文字の形は文明の諸國に共通同一で即ち世界的のものであるが、其名前は國々によつて種々雑多である。其中で、どれを取ればよいといふ根本的の理由は少しもない。日本人中、外國語を學んだ人の中で、大多數は英語を學だものであるから英語の名前が中でよいかと云ふに、これは日本羅馬字の名前として最も不都合である。アエイと使ふ字

にエ、イ、アイの名前がある杯は、一般の日本人に混雜を來すのみであつて、不適當であることは云ふ迄もない。母音の名は是非共、獨乙や伊太利の如く、日本語に使ふ通りに、aア、eエ、iイ、oオ、uウとすべきである。子音も皆之を使ふ五音の中の名をつけるが便利であつて、例へばgをジ、hをエ、チ、wをダ、ブル、ユ、yをワイ杯は無論不適當である、それ故私はこれ等をゲ、ハ、ワ、ヤとした。d、tの英名は一般の日本人には出來ないから、佛獨のやうにデ、テ。eは英獨共に日本音でないから、佛に則つてセ。eの音に従てabcの口調に順であるから、bはベ。pもbに準じてペ。k、qは英のケ、キ、クの複雑なるを避けて獨のカクを採用した。vは英のvの如き外國音を表はす時に使ふつもり故、

viとし、zも英の如くゼ。jは英のヂヂュ……及び佛のジヤジ……に對し、獨の以北の國のヤユ……と、全く異なる兩種あるが、佛名のジはgの英名と同様にて面白からず、英のヂュは日本語にない音であるから工合悪く、依て寧ろ獨のヨットに依てヨとした。

残りのf、l、m、n、r、s、xは、外國で多く言ひ習はして居る言ひ方は、e又は他の母音の後にるれ等の子音を添へたのであるが、一般の日本人には箇様な言ひ方は出來ない、強いてそれにしやうとすれば、efu elu等efu eluの如くなつて、外國の名前に似て非なる、變なものになる。外國人が日本語羅馬字の名前を(英人が獨乙語を學ぶ始めに獨乙の廿六字の名を學ぶと同様に)學ばうとする場合に、其名前をefu eluと發音せいと云

ふのは、余程おかしく且つ甚しく非世界的であるし、其名前をef el emてよいとすれば、本國人の日本人の方が却て出來なくて、生徒の外國人の方が正しく出來ると云ふやうなことになる。何れにしても不都合であるから、これは佛語の新名が後に母音の來るのになつて居ることに倣て、併し彼の如く不判明な母音をとらず、他の子音と同様にアエイオウを添へた音にした。fは日本人がそれに似寄た音を出し易い點からfnとし、他は言ひ易からうと思ふ處によつて、la ma na re snとした。lとrとにaとeを配したのは、西洋樂譜に6、2をla reと呼て居るのを參考して、それが自然の言ひ易い音になつて居ると思つたからである。残り一つのxの名は大分考へて見て、或は算術、代數でエックスと云ひ習

はせて居るから、それを使ってもよいかとも思うたが、どうしても上に云ふたやうに、「日本のXの名は *ckrisu* である」と云ふのが面白くないと思ふ方が勝つので、遂にギリシヤの名 *ksi* を漢字の反切流につめて、キとしてしまつた。X字は基督の符號に使ふことがあるから、キリストのキだと思つても差支ない。

かやうに名前を皆一音のものに撰むと、初學のものに之を覚えさせるのに、いろは歌よりも口調のよい、本式の三十一文字の歌が出来る。

ローマ字は、あべせて えふげ、はいよから、

まなぢ べくれす、てうぬ わきやせ。



はせて居るから、それを使ってもよいかとも思うたが、どうしても上に云ふたやうに、「日本のXの名はX(キリスト)である」と云ふのが面白くないと思ふ方が勝つので、遂にギリシヤの名ksiを漢字の反切流につめて、キとしてしまつた。X字は基督の符號に使ふことがあるから、キリストのキだと思つても差支ない。

かやうに名前を皆一音のものに撰むと、初學のものに之を覚えさせるのに、いろは歌よりも口調のよい、本式の三十一文字の歌が出来る。

ローマ字は、あべせで えふげ、はいよから、まなお べくれす、てうぬ わきやぜ。

丸山通一著

# 羅馬字のすゝめ

定價 金 五 錢  
郵税 金 二 錢

ローマ字を用ひることゝすればどれだけの利益が有るか、何故にローマ字を用ひねばならぬか、本書はローマ字の功用一切を至極丁寧に説き明かしたもので、教育家實業家を始め有ゆる階級の人々は、是非一讀して戦後日本の大發展にローマ字が如何に必要なを知るの料とせられたい。

發行所

東京市本郷區東片町

新公論社

一手大取次所

東京市本郷區西片町

内外出版協會

## Rômazi-Hirome-Kwai

[Zimusyo :

Tôkyô, Hongô, Higasikatamati 11L.]

wa Rômazi wo Nippon ni hiomeru koto ni nessinna Hitotati no Atumari de, *Gunzin, Gakusya, Yakunin, Zitugûkû, Syôbainin*, sonohoka *Sinkwan* demo *Bôsan* demo, *Kyôsi* demo *Sei'o* demo, *Deti* demo *Kozô* demo, *Onna* demo *Otoko* demo, tada Rômazi wo tukan koto wo sanseisuru Hito de areba sore no Kwaiin ni nareru.

Kwaiin ni A, B, C mitôri atte,—

**A-Kwaiin** wa, Kwai ni hairu tokini, Kane wo 10 sen dasu Hito de, kore niwa sono Namae wo noseta Zassi "Rômaji" (tugi wo mii!) wo 1-bu okuru.

**B-Kwaiin** wa, Kane wo maituki 10 sen-izyô no Wariai de dasu Hito de, kore niwa Za si "Rômazi" wo maituki 1-bu dutu okuru.

**C-Kwaiin** wa, Kane wo maituki 50 sen-izyô dutu dasu Hito de, kore wa Zassi "Rômazi" wo, maituki 1-bu dutu morau hokani, Rômazi-hirome no Hituyô ni ôzite nao seikiusuru koto ga dekiru.

Kwai no iroirona Zimu wa C-Kwaiin no Sôdan de suru koto ni natte oru.

## "Rômaji" (Romazi)

[Atai.—1-satu: 7 sen, Yûzei 5 rin; 1-nen: Yûzei tômo 80 sen.]

wa *Rômazi-Hirome-Kwai* de maigetû 15 niti ni dasu Zassi de, iroirona omosiroi Koto wo zentai Rômazi de nosete aru.

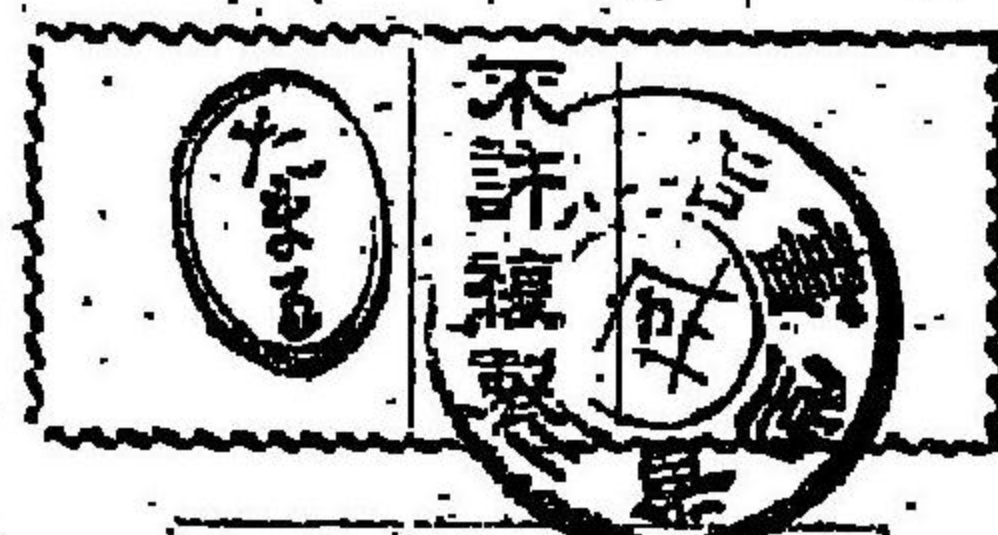
Kono Zassi ni deru Bunsyô niwa Eikoku-zin nado ga zibunriuni Nippongo wo kaite otta Kakikata (kono Hon no 38 p. wo mii!) de kaita mono ga daibu aru. Hyôdai mo sore no hitotu de, mada uwe no yôni Igi isuri ni natte oru.

Kore wa tasuno Nipponzin ga kono Hon ni kaita yôna Kakikata wo tukôte sakan ni zittini kaku de nakereba, *dokurituno Rômazi-Nippongo* ga naritatta koto ga, Seken-ippan ni mitomerarenai kara, yamu wo enai. Dôzo bayaku, kono Hon ni kaita yôna, *Nippongo no Seisi u ni ôte oru dokurituno Rômazi-Nippongo* ga mitomerarete, kono Zassi no Hyôdai nado mo sizenni "Rômazi" to naru yôni naritai.

Sore niwa, kono Hon de Rômazi wo narôta Hito ga, kono Tudurikata de ano Zassi *Kensyôbun* demo, *Tôsyô* demo kaite, zokuzokuto okurarereba, sono Keisei ga Kwai no Hito nimo wakarû to iu koto ni naru kara sô site hosii.

明治三十九年十一月廿一日印刷

明治三十九年十一月廿四日發行



日本式羅馬字真附  
定價金三十五錢

著者 田九卓郎

發行所 龜井忠一

東京市神田區裏神保町一番地

印刷所 三省堂印刷部

東京市神田區三崎河岸十二號地

發賣所

三省堂書店

東京市神田區裏神保町一番地

ア

名前	通常の		斜な		筆記體の	
	大	小	大	小	大	小
ア	A	a	A	a	A	a
ベ	B	b	B	b	B	b
セ	C	c	C	c	C	c
デ	D	d	D	d	D	d
エ	E	e	E	e	E	e
フ	F	f	F	f	F	f
ゲ	G	g	G	g	G	g
ハ	H	h	H	h	H	h
イ	I	i	I	i	I	i
ヨ	J	j	J	j	J	j
カ	K	k	K	k	K	k
ラ	L	l	L	l	L	l
マ	M	m	M	m	M	m

ズ  
メ

名前	通常の		斜な		筆記體の	
	大	小	大	小	大	小
ナ	N	n	N	n	N	n
オ	O	o	O	o	O	o
ペ	P	p	P	p	P	p
ク	Q	q	Q	q	Q	q
レ	R	r	R	r	R	r
ス	S	s	S	s	S	s
テ	T	t	T	t	T	t
ウ	U	u	U	u	U	u
井	V	v	V	v	V	v
ワ	W	w	W	w	W	w
キ	X	x	X	x	X	x
ヤ	Y	y	Y	y	Y	y
ゼ	Z	z	Z	z	Z	z

11

**RÔMAZI-BUN**

NO

**KAKIKATA,**

TUKETARI

**Nipponsiki-Rômazi**

NO

**RON.**

Rigakuhakusi

TAMARU-TAKURÔ

ARAWASU.

TÔK YÔ: SANSEIDO.

MEIDI 39N.

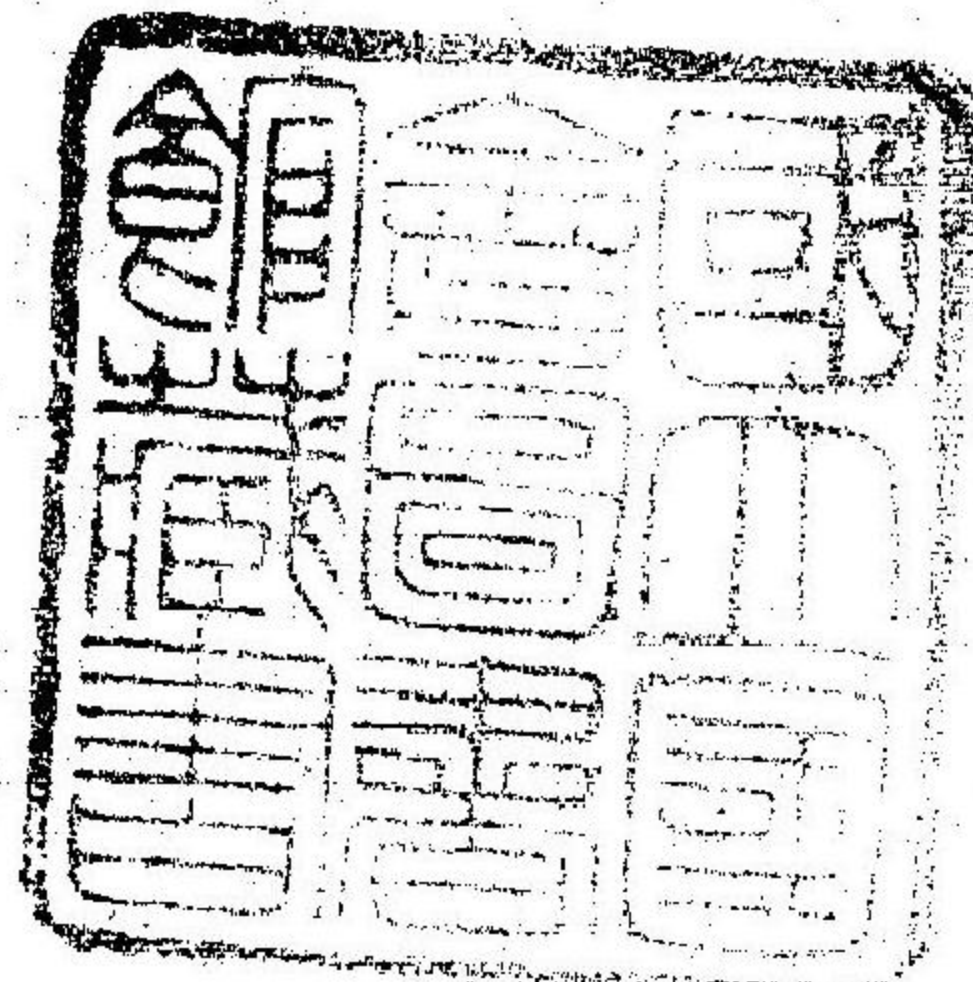
8118Ta 656R

凡 例

ローマ字文を書くのはむづかしいやうで極めてやさしい。此書を見れば五十音を知て居る人は誰でもたやすくすぐにローマ字で何でもかける。これ程やさしいものがあらうか。

小學校 女學校 中學校 師範學校等の生徒並に其他の一般の人々でローマ字文の書き方を知りたい人は本書に依て練習をなし、又文例を讀まれたい。

段々書いて居ると、ローマ字文を書くのはやさしいやうで中々むづかしいと思ふことが出て来る。こう云ふ點に就ては本書に現在著者が適當と思ふ所を説明してあるが、尙研究して見たら、改良追加すべき



337597

點が多分少くあるまい。これに就ては世の同志の人が考へられる意見を著者迄御示しなされて斯道の進歩を圖られることを希望する。

附録「日本式羅馬字」の論は羅馬字の必要不必要、綴り方の異同、其他の點に於て多少の意見を持たれる人々の爲に著者の立脚地を明にしたものである。學校の教師諸君其他の有志の諸君の一讀を希望する。

田中館理學博士、丘理學博士、藤岡文學士、寺田理學士、岡田文學士、永井醫學士其他の諸君は本書を編むときに、面白い文例を寄せられ、又は有益な助言を與へられた、特に藤岡文學士は自身今日の處、本書の附録に所謂へボン流の綴り方でローマ字文を書いて居られるに拘らず、其

文を本書の流に書き直して出すことを承諾せられた。茲に上に記す凡ての諸君に謝意を表はす。

明治卅九年十月

著者 しるす。

## 目次

はしがき . . . . .	1
第一章 ローマ字	
1. 大文字小文字 . . . . .	2
2. 名前 . . . . .	3
5. 練習 . . . . .	4
6. 筆記體 . . . . .	5
8. 練習 . . . . .	8
考へ物, 1-12. . . . .	8
第二章 五十音	
10. 五十音 . . . . .	10
12. ことば, 練習 . . . . .	12
13. ことばの要用な種類 . . . . .	13
14. 練習 . . . . .	15
考へ物, 13-16 . . . . .	16
第三章 他の音	
15. 拗音 . . . . .	17
16. 長音 . . . . .	18
17. はれる音 . . . . .	18
18. つまる音 . . . . .	19
20. 練習 . . . . .	20
考へ物, 17-19. . . . .	21
第四章 文章	
21. 文體 . . . . .	22
22. 大文字 . . . . .	22
23. 斜な字體 . . . . .	23



25. しるし . . . . . 24

はなし

Ha de wakaru 理學博士 丘淺治郎君 29

Tonti 同 君 29

Rikiu 理學士 寺田寅彦君 31

Mukasi-banasi (2-syô)

文學士 岡田正美君 32

Rikutu (3-syô) 文學士 藤岡勝二君 34

日記の文例 . . . . . 36

姓名の書き方 . . . . . 36

手紙の書き方 . . . . . 40

論説

Yabure-bôsi 理學博士 田中館愛橋君 44

考へ物, 20-22 . . . . . 45

第五章 語の切り續けと大文字  
の使ひ方

26. 概説 . . . . . 47

27. 名詞 . . . . . 48

28. 關係詞 . . . . . 54

29. はとも . . . . . 54

30. 形容詞 . . . . . 56

32. 副詞 . . . . . 59

33. 動詞 . . . . . 62

34. 動詞の語尾 . . . . . 63

36. はたらきの形容詞 . . . . . 65

37. 接續詞 . . . . . 66

38. 數に關係した語 . . . . . 68

天然界の話

Hayai Ryokô 著 者 71

Asozan 理學士 友田鎮三君 75

外國の人名や地名の書き方と讀み方 84

Alps-zan no Tonneru 著 者 89

Alt Heidelberg no Uta  
醫學士 永井潜君 95

考へ物, 23-26 . . . . . 96

ローマ字文の書き方に就て  
(ローマ字文)

1. Hyôzyunno Kotoba. . . . . 98

2. Hanasi no Buntai . . . . . 99

3. Meirei no Kotoba . . . . . 100

4. Utikesi no Kotoba . . . . . 101

5. Katta, Itta, Kutta, Otta nado . 102

6. Kono, Sono, Ano . . . . . 103

7. Ômozi no Toku . . . . . 105

8. Kanadukai . . . . . 105

9. Onbin . . . . . 107

10. Kango . . . . . 108

11. Kumiawase-kotoka. . . . . 109

12. "Dô" no tuita Kotoba . . . 111

13. Tiu (中), Gwai (外), Zyô (上)  
nado de kunaitateru Kotoba . 111

14. Kubetu no Sirusi . . . . . 112

15. On wo ageru Sirusi . . . . . 114

附録 日本式羅馬字の論...附1-附86

ローマ字廿六字の  
名前  
に就て . . . . . 附86.

## 羅馬字文の書き方。

はしがき。

明治の御代は、其當時、天皇陛下から仰出された中の、世界萬國の人と交通し、世界の有益な智識を我に取ると云ふ、動かない御主意によって進で来て居る。此二通りの方針で尙進むには、日本語をローマ字で書くやうにすることは到底免かれない。[附録「日本式羅馬字の論」第一節]。

ローマ字は西洋人専有のものでもなく、又之を用ひれば日本語が滅び又は西洋化すると云ふやうなものでもない。外國人が今日多く日本語を書き表はして居る書き方では、外國語の規則に拘泥し過ぎて、日本語の本來の性質を害して居る點が二三あるが、それを改めさへすれば、ローマ字は日本語の特性を書き表はすのに甚よく適して居る。[附録第二第三節]。

明治の人士特に少年少女諸君は此書に説く處に依て、正當なる日本語のローマ字文を書き習て、世の進みに後れないやうにすべきである。

### 第一章 ローマ字

1. <sup>オ-モジ</sup>大文字 <sup>ソ-モジ</sup>小文字。ローマ字は文明の諸國でどこでも皆使つて居る字で、その数は26ある。凡ての詞は皆此等の26文字を連ねて表はされるのであるが、詞によつて最初の字を<sup>オ-モジ</sup>大文字と云ふ特別な形に書くことがあるから、大文字と、普通の字即ち<sup>ソ-モジ</sup>小文字とを知らねばならない。

名前	大文字	小文字	名前	大文字	小文字
ア	A	a	ハ	H	h
ベ	B	b	イ	I	i
セ	C	c*	ヨ	J	j*
デ	D	d	カ	K	k
エ	E	e	ラ	L	l*
フ	F	f*			
ゲ	G	g			

名前	大文字	小文字	名前	大文字	小文字
マ	M	m	テ	T	t
ナ	N	n	ウ	U	u
オ	O	o	井	V	v*
ペ	P	p	ワ	W	w
ク	Q	q*	キ	X	x*
レ	R	r	ヤ	Y	y
ス	S	s	ゼ	Z	z

2. 名前。ローマ字は、上に云ふ通り、文明の諸國に共通であるけれども、その名前はイギリス、ドイツ、フランス其他の國々で皆違て居るから、日本でローマ字を使ふにしても、どここの國の名前を取ればよいと云ふ差別がない。それで、上には日本人の發音に順當で實際の使ひ途に當つて居ると云ふ處を標準として名前を撰んだ。覺えるには、次の様に歌の口調にしたものを覺えるがよい。

ローマ字は  
あべせで えふげ  
はいよから  
まなね べくれす  
てりる わきやせ。

3. 上のうちで\*のしるしをつけた七字は、日本語を寫すには入用がない、ただ外國の語や、人の名、場所の名等をもとのまゝに書き表はし度い時に使ふ。又物品に番號をつけるやうな時に、イ號、ロ號 杯云ふと同様に、A號 B號 杯云ふ時には、上の二十六字を上順に皆使うたがよい、それが萬國共通の順だから。兎に角字は二十六字皆世界的のもの故、凡て覚えたがよい。

4. 日本語に普通使はない七字のうちで、F, L, V 三字の名前は、只一通りの名前としては、上に書いたやうに日本音で云うてもよいが、正しくは英語 杯にある音に據て稱へるがよい。即ち F は上の齒を下唇に當て、その間からいきを出して「フ」と云ふ。L は舌の尖<sup>サキ</sup>を上齒の後ろにあて、置いてそれを離す時に「ラ」と云ふ。V は F と同様の口付をして強く「井」と云ふ。

5. 練習。次に書いてある字を一つづつ指してその名を呼べ。但し、O の上杯に (ˆ) や (˙) 杯の標しのあるに

は注意しなくてよい。

1. o e c s r a b p h k g q p d b  
y j i r l f t n m u w v z x

2. H E F L Z X K A  
J I L T Y V U W M N  
O K Q S C D P B R K

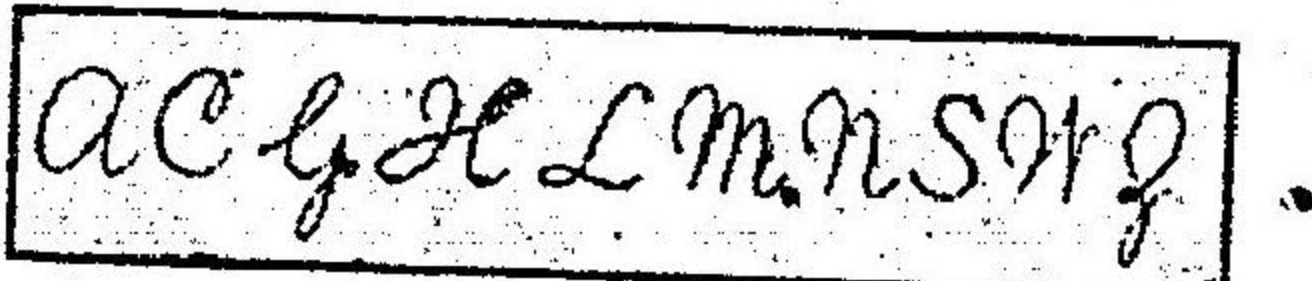
3. Paris, London, Berlin,  
Oxford, Quebec, Greenwich;  
Tôkyô, Yokohama, Sapporo,  
Uwazima, Ikeda, Rikutiu;  
Mexico, Zanzibar, Ceylon,  
Fiji; Everest, Huzinoyama,  
Vesuvius, Jungfrau, Kjölen;  
Delaware, Xingu; Napoleon,  
Washington, Albuquerque.

6. 筆記體。通常ペンを使って字を書く時には、上のやうな字體では書きにくい故に、次のやうな筆記體を使ふ：

	大	小		大	小
a	A	a	n	N	n
b	B	b	o	O	o
c	C	c	p	P	p
d	D	d	q	Q	q
e	E	e	r	R	r
f	F	f	s	S	s
g	G	g	t	T	t
h	H	h	u	U	u
i	I	i	v	V	v
j	J	j	w	W	w
k	K	k	x	X	x
l	L	l	y	Y	y
m	M	m	z	Z	z

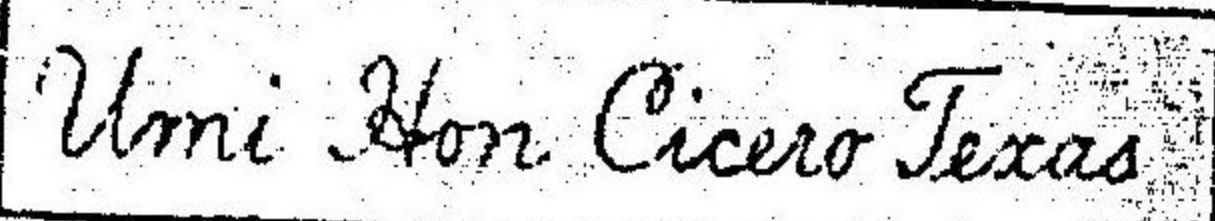
注意。大文字は、筆の初めと終りを、色々に、朝顔の蔓のやうに、ひねらせて書く人もある。a, c, g, h, l, m, n, s, w, z の大文字は下の様な形にも書く。

A C G H L M N S W Z

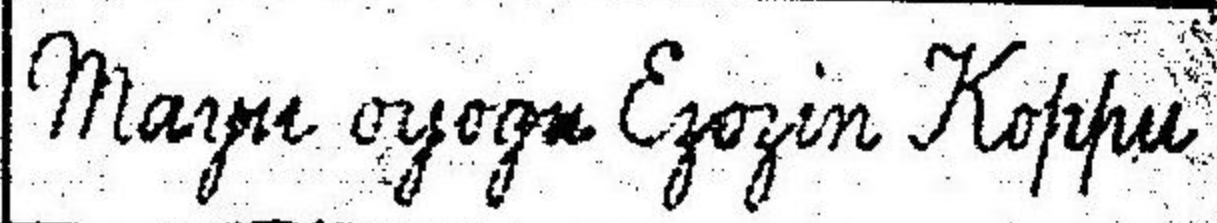


7. 印刷體で密に字を列べたのを筆記體で書く時には、下の例に見るやうに、通常成るべく筆を上げずにつづけて書く。

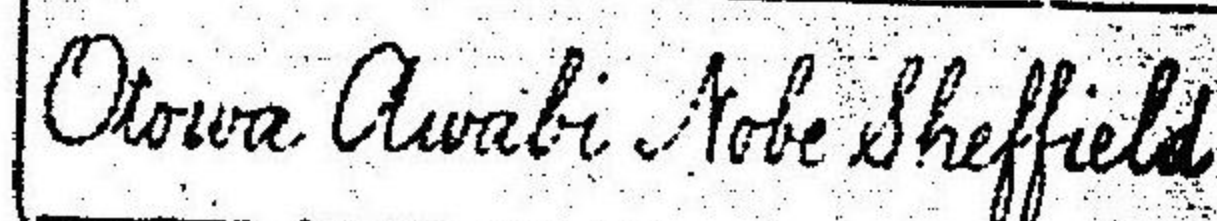
Umi Hon Cicero Texas



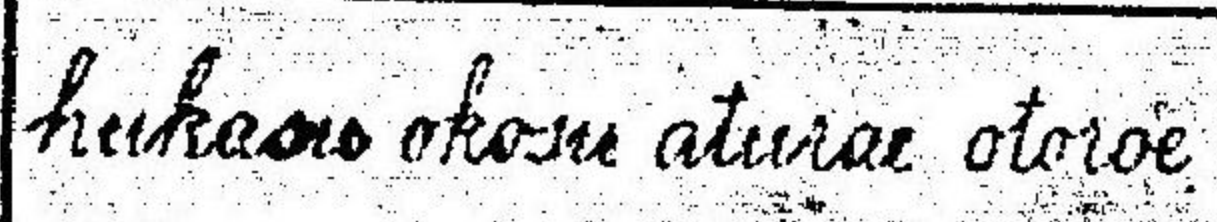
Mayu oyogu Ezozin Koppu



Otowa Awabi Nobe Sheffield



hukasu okosu aturac otoroe



8. 練習。次の字を筆記體で練習し、後に上の例に倣て第五節の練習を筆記體で書け。

1. iecors vxnuawm
2. tlbhk jyzpgqdf
3. IJHKX PBR
4. UVWY OD ANM
5. QZLSGCE TF

9. 通常の印刷體には EITSS 杯に見るやうに、多く長い線の端に短い線が付いて居る。この短い線は要用なものではないので、それを取除いて、全體同じ位の太さにした字體も時々使ふ。

ABCDEFGHIJKLMN  
abcdefghijklmn

OPQRSTUVWXYZ  
opqrstuvwxyz

下に云ふ間は特に此の如く短線のない太い字體に就て考へるのである。

### 考へ物。

[答の部分を隠して置いて考へるがよい]

1. 一筆で書ける大文字は 16 ある。何々か。
2. どうしても三筆でなくては書けない大文字は一つしかない。どれか。
3. 同じ大文字を二つ左右につないで外の大文字になるのはどれ。
4. 同じ大文字を其儘上下につないで外の大文字になるのはどれ。
5. 或る字の下へそれを倒にしたのをつないで外のを二つ横に並べたのになるのは何。
6. 下に真直な柱を付ける爲に外字になる大文字が二つあるのはどれ。
7. 大文字二つを柱を一處にして結び付けると、外の大文字になるのは何。
8. 倒にしても形が全く同じいか、又は少ししか變らない大文字は七つある。
9. 小文字で倒にしても似寄て居るのが 5。
10. 倒にすれば、形が互に入り代る小文字が三對ある。
11. 裏から順に見て、形が元と似寄て居る大文字は 11。
12. 裏から見れば形が互に入り代る小文字は二對ある。

答. 1. アエフゲハカレテキヤを除いたもの; 2. ハ; 3. キ; 4. テ; 5. ヴ; 6. テ, キ; 7. フラ; 8. ハイナオスキセ; 9. ラオスキセ; 10. ベク, アハ, ナウ; 11. アハイマオテウヰヲキヤ; 12. ベテ, ベク。

### 第二章 五十音

10. 五十音。ローマ字で五十音を表はすと、次のやうになる。

ア行	ア a	イ i	ウ u	エ e	オ o
カ行 k	カ ka	キ ki	ク ku	ケ ke	コ ko
サ行 s	サ sa	シ si	ス su	セ se	ソ so
タ行 t	タ ta	チ ti	ツ tu	テ te	ト to
ナ行 n	ナ na	ニ ni	ヌ nu	ネ ne	ノ no
ハ行 h	ハ ha	ヒ hi	フ hu	ヘ he	ホ ho
マ行 m	マ ma	ミ mi	ム mu	メ me	モ mo
ヤ行 y	ヤ ya	(イ i)	ユ yu	(エ e)	ヨ yo
ラ行 r	ラ ra	リ ri	ル ru	レ re	ロ ro
ワ行 w	ワ wa	ヰ wi	(ウ u)	ヱ we	ヲ wo
ガ行 g	ガ ga	ギ gi	グ ge	ゲ ge	ゴ go
ザ行 z	ザ za	ジ zi	ズ zu	ゼ ze	ゾ zo
ダ行 d	ダ da	ヂ di	ヅ du	デ de	ド do
バ行 b	バ ba	ビ bi	ブ bu	ベ be	ボ bo
パ行 p	パ pa	ピ pi	プ pu	ペ pe	ポ po

即ち aiueo は <sup>モイ</sup>母音 と稱へるもので、ア行の五音になり、他の十四字は <sup>シイ</sup>子音で、之を清音、濁音、半濁音の各行に配當して、その後へ aiueo をつなげば、其行が自然に出来る。それ故字數は 19 字丈で (') や (°) の印しがなくて、音を皆表はせる。

子音は、母音が後に來なければ、音を表はさない。k, s, t 等を カ, ス, テ 等と云ふのは 字の名前に過ぎないので、カ, ス, テ 等の音を表はすには、ka, su, te 等とせねばならない。

11. 上の表の中で、( ) の中にあるのは、假名で書いても、ア行のイウエと同様にするから、ローマ字でも、yi, ye, wu とはしないで、ア行と同じにする。

假名の ヰ は、普通 イ と同じに發音するから、其時にはやはり i と書いて、wi は殆ど川がない、又 ヱ ヲ も音が エ オ と同じである處には ヱ ヲ と書く。

假名で ハ ヒ フ ヘ ホ で表はす音でも、實際の音が ワ イ ウ エ オ ヲ 等であれば ワ, i, u, e, we, wo, o と書く。

シとサ、ズとツとは日本中多くの地方では同様に発音するけれども、元來四國邊の人が實際やうに居る通り、少しく違ふが正しいと見て、假名遣ひの通りに區別して書く。[わからない時はシズに従へ]

これ等は皆次の節以下にある例で見い。

12. ことば。一つの詞を組立てる字は、下の例で見る通り、皆續けて書く。

綜覧。下のローマ字で書いた詞を讀め。[右の端にある漢字假名を蔽ひ隠して試みるがよい]

Ai, Ie, O	藍, 家, 尾
Kai, Kiku, Koke	貝, 菊, 苔
Sasa, Suso, Usi	笹, 蓐, 牛
Tati, Tetu, Seito	太刀, 鐵, 生徒
Nuno, Natane, Ani	布, 菜種, 兄
Haha, Hune, Hohei	母, 船, 歩兵
Mame, Muti, Himo	豆, 襪, 紐
Yamiyo, Yume, Kaya	暗夜, 夢, 蚊帳
Rai, Riku, Muro	雷, 陸, 暖室

Wa, Uwo, Warumono	輪, 魚, 惡者
Gai, Geta, Higure	告, 下駄, 日暮
Zi, Suzuri, Goza	字, 硯, ござ
Dodai, Momidi, Tidu	土臺, 紅葉, 地圖
Biwa, Daibutu, Panorama	琵琶, 大佛, パノラマ

13. a. 上の例にあるやうな、物、人、所、時、事柄、杯の名の詞は名詞と云ふもので、之を書く時には、上の例で見るやうに、其れの初の字を大文字で書く。

b. 私 watasi, あなた anata,  
これ kore, それ sore,  
こゝ koko, そこ soko

杯は、同じく人、物、所を示すけれども、人の名、物の名、所の名の代りをして居るもので、之を代名詞と云ふ。これには大文字を使はない。

c. 名詞や代名詞の次に通常がを、に、の、から、へ等の語、



即ち **關係詞** が来るが、これは別の語として獨立させて書く。例へば

私 が、 犬 を、  
watasi ga, Inu wo,  
横濱 から、 こゝへ。  
Yokohama kara, koko e.

其他 要用的な 詞 の 種類 は：

d. **動詞** と云うて、

讀む yomu, 呼吸する kokuusuru,  
見て mite, 及第して kiudaisite,  
咲いた saita, 咲かない sakanai  
杯の やうに 働 き を 示 す 詞；

e. **形容詞** と云うて、

yoi Hito, samui Asa,  
kireina Hana, marui Wa,  
tamagonarino Isi,

杯の yoi, samui, kireina, marui,  
tamagonarino 等の やうに、名詞  
杯の 前 に 來 て それ の 性質 を  
表はす 詞；

1. **副詞** と云うて、

umaku dekita, osoku aruku,  
sumiyakani ugokasu,  
yurarito matagaru

杯の umaku, osoku, sumiyakani,  
yurarito の やうに、動詞 杯 に 添  
へて 使ふ 詞 等 である。

故に 此等の 詞 は 皆、上 の 例 の  
やうに、一つづつ 纏めて 書く。

14. **練習**。次の 詞 を 筆記體の ロ-  
マ字 で 書け。

1. 春, 夏, 秋, 冬, 朝, 晝, 暮方,  
月, 星, 陸, 雨, 雪, 風, 山, 川, 野原.
2. 梅, 櫻, 松, 竹, 桃, 柿, 糸瓜,  
人, 犬, 猫, 馬, 牛, 鶴, 鳩, 鷹, 鷲, 蛇.
3. 顔, 目, 口, 鼻, 耳, 眉, 髭, 腕, 手, 指,  
足, 家, 机, 繪具, 筆, 杖, なぎなた, 鍵,  
簾, 籠, 箆, 下駄, 兵兒帶, 手拭.
4. 匙, 虬, 數, 葛, 鼠, 雀, 傷,  
紅菜, 氏, 鯨, 脣, 鶉, 水, 味.
5. 暑い, 暖い, 涼しい, 寒い, 黒い, 白い,  
赤い, 青い, 細い, 太い, 狭い, 廣い, 長  
い, 短い, 強い, 弱い, 鋭い, 鈍い.
6. 減る, 植える, 數へる, 起す, 受ける,

讀む、なぐる、<sup>シバ</sup>縛る、備える、飾る、<sup>アガ</sup>上る、<sup>サガ</sup>下る、昇る、降る、交ぜる、瘠せる、<sup>ツツ</sup>悔る、除く、束れる、<sup>キ</sup>舐ぶる、<sup>トチ</sup>述べる、閉る、尋ねる。

7. ゆるりと話す、<sup>キウ</sup>急に動く、ほつりと落ちる、<sup>ツツ</sup>びかりと光る、べたりと座る、ぶつりと切れる、げちげちはれる。

### 考へ物。

[答は此本のうちどこかに書いてある]

13. 日本の中で 要的な社のある地名で、それをローマ字で書くと、前から讀んでも後から讀んでも同じになる處がある。どこ?

14. 日本の中の國で、その名をローマ字で書くと、前から讀んでも後から讀んでも同じになる國が三つある。どこ?

15. 四千噸以上の日本の軍艦(戦艦巡洋艦)に其名をローマ字で綴ると、終りの二字が、どれとどれとを較べても同じいのが六艘あって、其頭を取て續けて讀めば、日露戦争に最要川であった軍艦の名になる。

16. 日本の中の四字綴りの縣の名で、其四字を綴りかへると、日本人が體につける物になり、又綴りかへると、悪いことをした人にあたるものになる。[但し綴りかへるときには大文字と小文字との區別を考へない]

### 第三章 他の音

15. <sup>ヨ</sup>拗音。假名でキヤ シヤ 等の如く書くものは下に示すやうに表はす:

キヤ kya    キユ kyu    キヨ kyo

シヤ sya    シユ syu    シヨ syo

チャ tya    チュ tyu    チョ tyo

ニヤ nya    ニユ nyu    ニヨ nyo

ヒヤ hya    ヒユ hyu    ヒヨ hyo

ミヤ mya    ミユ myu    ミヨ myo

リヤ rya    リユ ryu    リヨ ryo

ギヤ gya    ギユ gyu    ギヨ gyo

ジヤ zya    ジユ zyu    ジヨ zyo

ヂヤ dya    チュ dyu    チョ dyo

ビヤ bya    ビユ byu    ビヨ byo

ピヤ pya    ピユ pyu    ピヨ pyo

クワ kwa    クワ gwa

即ち假名で書く時の初の字につく母音を省いて書く。

例。客 Kyaku, 書物 Syomotu, 茶 Tya, 如來 Nyorai, 百 Hyaku, 逆に gyakuni, 野宿 Nozyuku, 華族 Kwazoku.

**16. 長音。**音を長く引く時は假名は どうでも 關はず, 只 母音の上に への 符號を 付ける。

例。太郎 Tarô, 次郎 Zirô, 空氣 Kûki, 外務省 Gwaimusyô, 東京 Tôkyô,

稽古, 衛生の如きは けいこ, えいせい 故, Keiko, Eisei; 又, 收入, 急流杯は しうにう, きうりう, 故, Siuniu, Kiuriu とする。

云うたの iuta に對して 結うたは yûta.

**17. はねる音。**はねる音には ンの處に n を使ふ。

例。勉強 Benkyô, 困難 Konnan, 天秤棒 Tenbinbô, 人民 Zinmin.

但し, はねる n の後に アイウエオ 又は ヤユヨ の音が来る處に, 其儘にすれば, ナニヌネノ, ニャ ニュ ニョ ト 同じになる故, 區別を表はす爲に n の後に'

の標しを 挟む。

品位 Hin'i, 官員 Kwan'in, 半圓 Han'en, 金曜日 Kin'yôbi, 引用 In'yô, 儉約 Ken'yaku.

**18. つまる音。**つまる音を表はすには, それの次に来る子音を二つ重ねて書く。

學校 Gakkô, 物價 Bukka, 決して kessite, 結晶 Kessyô. 一體 ittai, 一致する ittisuru, 一杯 ippai, 一俵 ippyô, 立派な人 rippana Hito, 鐵砲 Teppô.

**19. 俗語や訛りの音の中**には一通りの論說記事文などに使はない音がある其内でヤ行の音のあるイェ(エの訛り)は ye, シェ チェ ニェ ジェ ザェ は他の拗音と同様に sye, tye, nye, zye, dye と書く。

又トサン, ッサンのつまつたのは ttsan と書く。例へば

オトツァン Otottsân; (女の名のオミッサンをつめた) オミッツァン O-Mittsan の類

20. 練習。次の字をローマ字で書け

1. 遠い, 小さい, 大きい,  
書かう, 勉強しやう, 遠慮する。
2. 大坂, 仙臺, 京都, 鳥取, 日光;  
返却, 行脚, 印形, 一足飛び, 寫眞。  
醫者, 月蝕, シヤツ, 收縮, 朱墨, 蝶々。  
イソコク
3. 野宿, 色寫眞, 狸々。  
茶碗, 一軒茶屋, 女學校。
4. 盤若, 天女, 百姓, 三百, 冠, 刺八, 三袋。  
山脈, 妙法, 略字, 治療。  
シヨクワイ コイコク フワイコク  
集會, 開化, 外國。
5. 遠洋航海, 金貨本位。
6. 婆さん, ちいさん, みーちゃん,  
ぼっちゃん, かーちゃん。
7. 一寸 伺ひました。  
チャキチャキと 切れる。  
ニョロニョロと 出る。  
ピョコピョコと あたまを 下げる。  
ムチャクチャに かき廻す。

考へ物の答。

13. Atuta.      14. Awa, Awa, Iki.
15. Matusima, Itukusima, Kasima.  
Asama, Sikisima Aduma. MIKASA.
16. Tiba, Tabi, Bati.

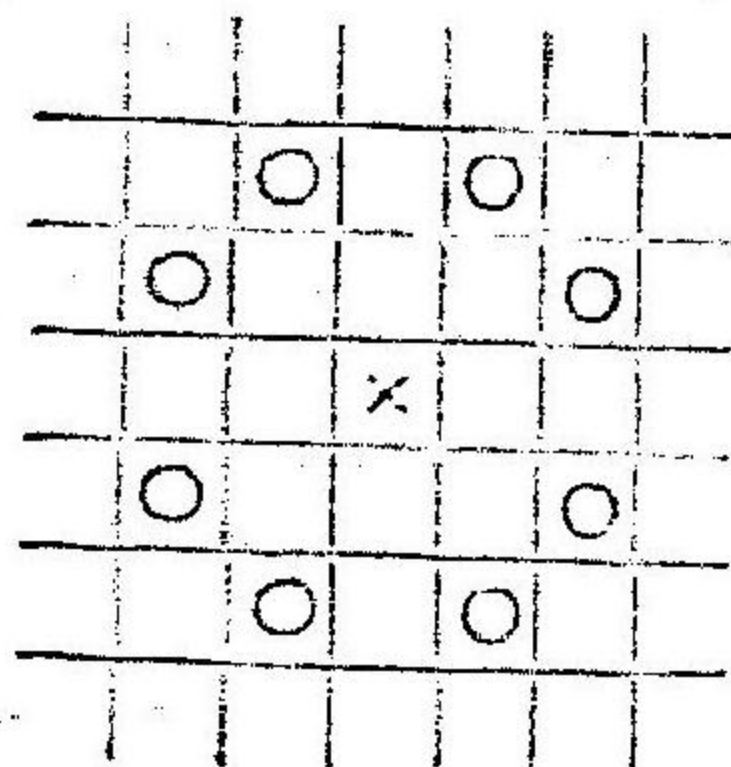
KANGAEMONO.

[答は此本のうちどこかに書いてある]

17. 日本の軍艦のうちで, 前から讀でも後から讀でも同じ名のもの二つを考へ出せ。

18. 日本の中の五字綴りの都會の名で, 其五字を綴りかへると, どんな學校にでも居る大切な人になる。どこ, 誰?

19. 西洋將碁の桂馬は, 日本將碁の桂馬のや



うに前方ニヶ處  
丈でなく, 前後左  
右, 即ち圖の×印  
の處から○印の  
處八ヶ處のうち,  
どれへでも飛べ  
る。このやうに  
飛で讀めば, 左の  
字列びは誰でも  
知て居る日本の  
諺になる。[左の  
中の R で讀み初  
める]

S	k	r	n
R	y	y	o
ô	i	o	o

### 第四章 文章

21. 文體。 ローマ字の文體は話の體に書くことにきめる。

それ故、例へば

Hito wa Banbutu no Rei nari.

Benkyôsezaru bekarazu.

の類の文を書いてはいけない。

Hito wa Banbutu no Rei de aru.

Benkyôseneba naranai.

のやうにすればよい。

但し特別の目的があつて外の文體を其儘に寫すと云ふ場合は勿論例外である。

22. 大文字。大文字は上に述べた通り 名詞の初めに使ふ 外に、文章の初めの字 はどんな詞でもかまわず大文字で書く。

第25節以下の例で見ると通り。

又文の標題や、本の表紙、店の看板に書く詞は、初めの

字のみでなく、全體大文字で書くが通例である。

此書29頁以下の標題でも見る通り。

23. 斜な字體。文章の中で特に目立たせたい字や句は多く斜な字體に印刷する。斜な字體は次の通り:—

	大文字	小文字		大文字	小文字
a	A	a	m	M	m
b	B	b	n	N	n
c	C	c	o	O	o
d	D	d	p	P	p
e	E	e	q	Q	q
f	F	f	r	R	r
g	G	g	s	S	s
			t	T	t
h	H	h	u	U	u
i	I	i	v	V	v
j	J	j	w	W	w
k	K	k	x	X	x
l	L	l	y	Y	y
			z	Z	z

24. 筆記體では、目立たせる處の下に横線を引く。例へば、印刷體で

*Ken'yaku to Rinsyoku to wa ôini tigau.*

とするのを筆記體にして、

*Ken'yaku to Rinsyoku  
to wa ôini tigau.*

25. するし。文章の中に使ふ色々の標しは次の通り：

a. 止め「。」通常の文章の終りに置く。

例. *Ame ga hareta.*

*Kaze ga Kumo wo hukiha-  
rau.*

*Korekara watasi wa Rômazi  
de kaku.*

或詞を略して書く時には、文

章の中途でも其詞の直ぐ次に「。」を置く。

*Sunawati* を *sun.*,  
*tatoeba* を *tat.* と書く。

例. *Gwaikokugo tat. Eigo dewa  
e, f, g, l, v no Zi mo tukau.*

b. 問ふ標し「？」問ひの文の終りに置く。

例. *Tarô San ga kimasita ka?  
Sore wa nani?*

c. 呼ぶ標し「！」己れの感動を表はす詞又は人に呼びかける詞や文の終りに置く。

例. *Oya-oya! Kore womi-tamae!  
Koko e oide!*

d. 切り「,」文章の間の詞の切り目に置く。

例. *Hai, sô desu.*

*Ame ga hutta kara, kaette  
kimasita.*

Soredemo, watasi wa kô  
omoimasu.

e. <sup>チリギ</sup>中切り「;」一つの文章の  
中で、意味が一寸切れる處に  
置く。例へば

Tôkyô wa ôkii Mati desu;  
Zinkô ga hyakuman no  
uwe arimasu.

f. <sup>オーギ</sup>大切り「:」立返つて云ひ直  
すとか、説明を添へるとか、文  
を引用するとか凡て氣を變へ  
て文を續ける處に置く。

例. Tarô no iu koto niwa: "Iya,  
sore wa ikenai . . . ."

g. <sup>クワツツ</sup>括弧「( )」説明の爲の言葉  
や句を添へる時に、次の例の  
やうに、その前と後とに置く。

例. Maeno Nitiyôbi (5getu 6niti)  
no Hiru ni Kwazi ga atta.

h. 線「—」氣を變へて詞を  
續ける時、説明の句を添へる時  
杯に使ふ。

例. Sono Kodomo ga kiuni naki-  
dasimasita,—tabun kowa-  
ku natta no desyô.

i. 引用の標し「“ ”人の云ふ  
詞又は云うた詞を其儘に書く  
時にその前後に置く。

例. "Ron yori Syôko" to iu  
Kotowaza ga arimasu.

j. つなぎ「-」二つの語を組合  
せて一つの詞を作る時、又は一  
つの詞が一行の右端に書き切  
れない時に、其行に一部分を書  
き、其次に此標を置いて、其詞が  
次の行につづくを示す。例へば

小學校生徒 Syôgakkô-seito,  
話しつゞける hanasi-tudukeru.

. . . . .watasi wa benkyô-

site iru.

6. 字を省く 標し「'」正しい語の或字を省いて俗語などの音を表はす時に、字の省いてある處に使ふ。例へば

atta mono da kara

の代りに

atta mon' da kara.

同じ標しをはねる n の後に使ふ場合のことは 17 節に學だ通り。

7. 星「\*」劍「+」等は文の中の或字の右に添へ、同じ標しを紙の下部に置いてその註を書くに使ふ。

Tat.\* konna yôni tukau.

考へ物の答。

17. Nissin, Iki.    18. Tôkyô, Kôtyô.  
19. Ron yori Syôko.

\*Tat. wa tatoeba no Ryakuzi.

HANASI.

HA DE WAKARU.

*Oka-Asazirô Kun.*

*Onna.* “Sensei, Niwatori ga wakai ka tositotte iru ka, dôsite miwakeru koto ga dekimasu ka?”

*Sensei.* “Sore wa nan' demo nai; Ha de suguni wakaru.”

*Onna.* “Datte Niwatori niwa Ha ga arimasen.”

*Sensei.* “Niwatori niwa nai ga, watasi ni aru.”

TONTI.

*Oka-Asazirô Kun.*

Aru Hito ga Kane wo motte Yamamiti wo tôru tokoro e, Oihagi ga dete Pisutoru wo mukenagara:



“Inoti ga osikuba Kane wo dase!”

Sonohito: “Kane wa mina agemasu ga, zituwa kore wa watasi no Kane dewa arimasen, Oyakata no desu. Uti e kaette Miti de torareta to ittemo, Oyakata ga utagau ni tigai-arimasen kara, Oihagi ni deatta Sirusi ni Bôsi wo Pisutoru de utte Kizu wo tukete kudasai; O-negai desu kara.”

Oihagi: “Yorosii,”—zudon.

Sonohito: “Koko emo hitotu” —zudon.—“Kono Gwaitô no Suso emo hitotu” —zudon.—“Gwaitô no Sode emo hitotu.”—zudon.—“Koko emo hitotu.”—

Oihagi: “Mô Tama wa naku natta. Hayaku Kane wo yokose!”

Sonohito: “Nani, Tama ga naku natta to! Simeta! Kane wo itimon demo yatte tamaru mono ka!” to iute sutasuta nigete simôta.

---

**RIKIU.**

*Terada-Torahiko Kun.*

Enosima e Asobi ni yuita arû Hito ga Annaizya wo turete Meisyo Kiuseki wo kenbutusita. Tigogahuti ni kita toki, Annaizya ga “Koko wa mukasi *Rikiu* to iu Hito ga Mi wo nageta Tokoro da” to setumeisita. “Rikiu towa dô kaku no ka?” to Kyaku ga taduneruto, Annaizya no Kotae ga omosiroi. “Mukasi kara *Rikiu* *Rikiu* to itteru ga, Zi niwa amari kakan' yô da.”

---

## MUKASI-BANASI.

*Okada-Masayosi Kun.*

### 1. Zittoku.

Isya no Mesitaki ga Danna ni mukai :—“Omaesama no Haori wa hitosama no towa daibu tigaimasu nâ” to iu ni,—

Isya :—“Iya, wasi no wa Haori dewa nai ; *Zittoku* to iu Mono da” to ieba,—

Mesitaki :—“Hê, myôna Namae no Mono de —. Sono, mata, *Zittoku* to iu no wa, naze de gozaimasu ?” to iu ni,—

Isya :—“Sareba sa ! Suwareba Haori no *gotoku*, tateba Koromo no *gotoku*,—*gotoku gotoku* de, *zittoku* da !” to iu.

Mesitaki kore wo kiite, ‘*Koitu wa yoi Koto wo kiita*’ to, sassoku

Kinzyo e itte :—“Oi, oi ! *Zittoku* to iu Wake wo sitte’ru ka ?”

Hitobito :—“Iya, siranai. Dô iu Wake ka ?”

Mesitaki :—“Sareba ! Suwareba Haori ni *nitari*, tateba Koromo ni *nitari* ; *nitari nitari* de — — iya ! kore wa sitari !”

### 2. Omosiroi Kinsyu.

Hatibei ga Sake wo nonde iru Tokoro e Santa ga kita node, “Sâ, ippai yare !” to iuto, “Iya ! Ore wa titto Gwan ga atte, 3 nen-kan Kinsyu wo sita kara” to iu. “Soitu wa abunai ; yose, yose !” to ieba,—“Nani, kitto yaritôsu tokoro wo mite ore !” to iute kaetta.

• Tugino Ban, Hatibei ga nonde iru Tokoro e, Santa ga “Sake nomi ni kita” to iute kita. Hatibei

akirete, “Sore miro! Yûbe itta Koto wo mô yaburu no ka?” to iuto,—

Santa:—“Iya, yaburi wa sinai ga, ore mo kangaete, 3 nen no Kinsyu wo 6 nen ni nobasite, Yoru dakewa nomu koto ni sita” to iu.

Hatibei:—“Sore mo ii ga, issonokoto, 12 nen ni nobasite, Yuru-hiru nome!”

---

**RIKUTU.**

*Fujioka-Katsuji Kun.*

**1. Tiu-Kô.**

A:—“Dômo Tiu toka Kô toka iu Koto wa ano Kanzi de mita Tokoro ni Imi ga aru kara, are wo haisitewa komarimasu yo.”

B:—“Dewa, Mekura niwa Tiu-Kô wa arimasen ka nâ?”

**2. Genpô (Hikizan).**

“Genpô (Hikizan) towa Kazu no aru mono no uti kara ikuraka wo toru no wo iimasu” to Sensei ga osieta. Kore wo kiita Seito no hitori ga akuruhi ni iuta:—“Sensei, Dorobô wa Genpô wo simasu.”

**3. Tôgô Taisyô.**

Otôsan: “Kore, Tarô! Omae wa ôtyaku de ikenai. Tonari no Zirô San wo miro! Nakanaka otonasikute Gakkô demo yoku odekinasaru noni, omae wa onazi kokonotu demo Siyô ga nai. Titto minarai-nasai!”

Tarô: “Otôsan! Otôsan wa rokuziu-iti de, Tôgô Taisyô mo rokuziu-iti desyô. Dyâ, Otôsan mo Tôgô Taisyô mitaini eraku nareru no?”

---

## NIKKI.

Md. 39 n. 10 gt. 13 nt. (Doyôbi)  
Asa Kumori, Hiru kara Hare.

Asa Rei no tôri Gakkô e yuita.

Gogo, Gakkô no Keiko ga nai  
yuwe, Saitô-Tarô Kun to Takino-  
gawa e Sanpo wo site, Momidi wo  
mite kita. Kutabireta keredomo,  
omosirokaita.

Yûmesi no noti, Takata-Saburô  
Udi ga tadunete korarete, 9-zi  
goro made Hanasi wo sita.

### 姓名の書き方

姓名の呼び方は、西洋諸國と日本と反對で、西洋では大抵名を前に姓を後に書く。それ故、西洋の人に關係して、

(又は西洋の人に關係しなくても) 西洋文で書いてある文には、日本人の名も、逆に名姓として通常書いて居る。例へば神田乃武氏が英文の讀本の序の終りに Naibu Kanda と書いた類である。人によっては、西洋文で書く書かないに拘らず、自分の名を羅馬字で書く時には、習慣上から名姓と逆に書く人がある、併し多数の日本人は、自分の姓名を逆に書くことが面白くない處から、羅馬字で書くときにも、姓名の順に書く。そうすると、例へば神田氏の Naibu Kanda は、知らない人は姓が Naibu で名が Kanda と云ふのかと思ふであらう。簡様な誤を避ける爲には、日本流に姓名の順に書くときには、其間につなぎを入れて、上の Saitô-Tarô, Takata-Saburô のやうにするがよい。若し頭字まで畧して書く時には、齋藤大郎君は S.-T. 又は西洋流に T. S., 高田三郎君は T.-S. 又は西洋流に S. T. とする。

姓名の順に書く時にはつなぎを入れるといふ様な約束でもなければ、例へば T. S. とあるのが、どちらが姓の頭字、どちらが名の頭字か丸で解らなくなる。

姓名の綴り方に就ての注意。

一體日本人のローマ字と云ふものは、此迄一般の日本人の間には使はれなかつたので、外國人と關係するやうな必要な場合に姓名其他の日本語を書くには、多く外國語、特に英語の音の規則で、日本語の音に、近い音を出すやうな書き方を使った。それ故そのやうな人は、其名を、上のやうな外國流の書き方で外國人扱に知られて居るから、今書き方を變へては、人違ひをされてこまることもある。それ故、

是迄使て來た外國語流の綴り方を其儘使ひたいと云ふ人の名は、其通りに書いて宜しい。

此外國流の書き方で、此書に説明したのと違ふののうちで主なるものは、

シを shi,

チを chi,

ツを tsu,

フを fu,

ジ、ヂを ji,

ヅを zu 又は dzu,

と書くのである。又エを多く ye と

シャ シュ ショ を

sha, shu, sho,

チャ チュ チョ を

cha, chu, cho,

ジャ ジュ ジョ を

ja, ju, jo

書く。これは外國音にしても e の方が近いのであるけれども、外國人が誰りか何かを聞いて書いた誤を其儘に眞似をして ye と書く人があるのである。

それ故、例へば、日本流で

ふぢな(カ)か きくち よしえ

Hudioka, Kikuti, Yosie

と書いて然るべき人を、上のやうな理由で、當人が特に希望する場合には、

Fujioka, Kikuchi, Yoshiye

と書いて宜しい。〔外國語の綴り方が日本語の正式の書き方として不適當であると云ふ論は此書の附録「日本式羅馬字」と云ふ文に詳しく述べてある。〕

羅馬字の日本語が、此書に説明したやうに、一つの外國語にたよると云ふことなく獨立に成り立って、日本人の間にそれを使ふことになれば、日本語を正しく發音しやうと思ふ外國人は勿論その發音の規則を學ぶから、日本人が姓名を書くにも、外國流にする必要が無論なくなる。それ故、上に云うたやうな差支のない人は、勿論此書に説いたやうな綴り方で自分の名を書くが宜しい。

TEGAMI NO KAKI-  
KATA.

Rei 1.

*Takahasi San,*

*Kinôwa wazawaza o-ta-  
dune kudasareta tokoro, aya-  
niku Rusu ni simasite, siturei  
desita. Nanika Goyô de demo  
arimasita ka? Goyô nareba,  
kotira kara ukagaimasu kara,  
Go-zaitaku no Toki wo, Ha-  
gaki de demo, tyotto o-sirase  
kudasai!*

*Sayonara, siturei!* ☉

*10 gt. 14 ka. Gotô-Zirô.*

*Usigome,*

*Yaraityô 3.*

Rei 2.

*Tarô Kun,*

*Watasi wa Asu Hiru  
goro kara de'te, Kônodai no  
Hô e ensokusiyô to omôte iru  
ga, Kimi mo issyoni yukanai  
ka?*

*Yukunaraba, Yûgata ni  
watasi no Tokoro e kitamae!  
Miti nado wo sôdانسuru kara.*

*Sayonara!*

*10 gt. 12 nt. Zirô.*

*Zyôbukuro no Omote.*

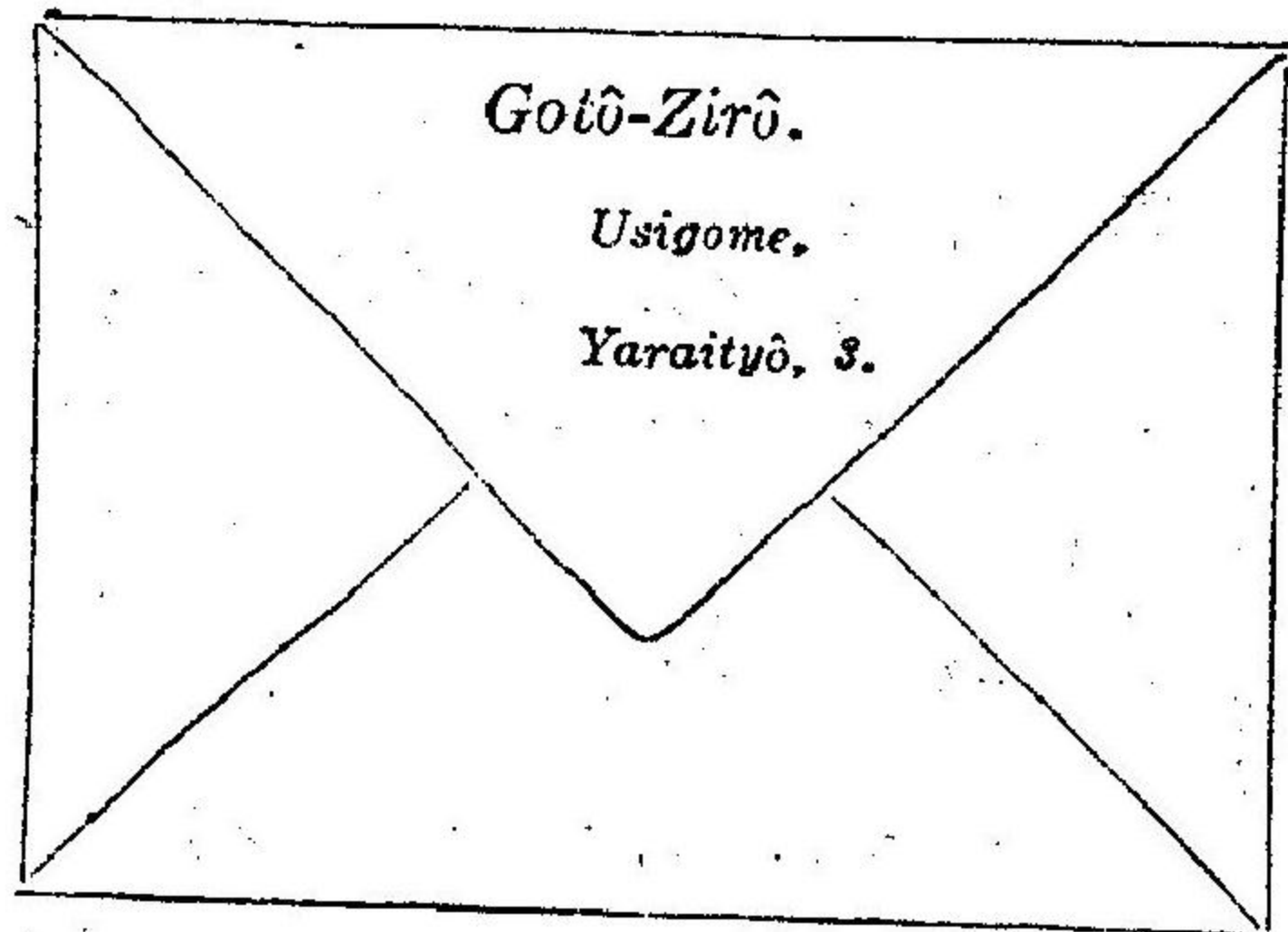
Kitte.

*Saitô-Tarô Sami.*

*Tôkyô, Kôzimatiku,*

*Iidamati 1-tyôme 18.*

Zyôbukuro no Ura.



Tegami no Hazime, *Yobikake* no Kakikata wa, seisikiniwa, (1) no *Takahasi San* no yôni, Myôzi e *San*(matawa *Sensei* nado)wo tokeru. Sikasi sitasii Tomodati naraba, Na de yondemo yoi, mata *Kun* wo soetemo yoi,—(2) no *Tarô Kun* no yôni. Mata, mukô no Namae wo yobu koto wo konomanakereba, *Môsiagemasu*, nado to kaitemo yoi.

Bun no Owari wa Bawai ni yotte,  
*Sayonara!*

*Sayonara, siturei!*

*Sayonara, gokigen'yô!*

nado ga yoi.

Kotira no Namae wa, seisikiniwa, (1) no *Gotô-Zirô* no yôni Myôzi to Na to ryôhō kaku. Sikasi, sitasii Tomodati e naraba, Na dake wo kaitemo, Myôzi dake wo kaitemo yoi.

Zyôbukuro no Kakikata wa itumo uwe no yôni suru. Tadasi, kotira no Na ya Tokoro wa kakanakutemo yoi.

Kotira no Banti wo, Omote ni kakanaide, Senpō e sirasetakereba, (1) no Owari ni aru yôni, Naka ni Banti wo kaku.

Nagai Katati no Zyôbukuro wo tukôtemo, betuni Tigai wa nai.

**YABURE-BÔSI.**

*Tanakadate-Aikiu Kun.*

Aru Inaka-Sinsi ga itumo yabureta Bôsi wo kabutte iru node, Saikun kara "Atarasii Bôsi wo o-kainasai" to iu Kogoto wo ukete otta ga, Sinsi wa "Koko dewa minna *sitta* Hito bakari da. kara sonna Hituyô wa nai" to iinukete otta. Tokoroga, kono Sinsi Tôkyô e deru koto ni natta node, Saikun: "Kondo kosowa atarasii Bôsi wo kôte kabutte oidenasai" to iutara Sinsi no iu niwa, "Iya, Tôkyô e dereba minna *siran'* Hito bakari da kara Hituyô wa nai" to mata iinuketa. Koredewa eikiu matudai Eôsi wo aratameru Toki wa konai no de aru.

Ima, Kanzi ya Kana wa Tôyô no Yabure-bôsi de aru. Mono no wakatta Saikun naru Monosiri wa kore wo aratameru koto wo toite-

mo, kore de Kokunai wa tôru kara to iute aratamenai. Sikaruni, ima Sekai no Hiroppa ni dekakeru tokoro de, hito ni sirareru koto wo tutomeru tokoro de aru kara, dôsi-temo kono Yabure-bôsi wo aratamete hitonamino Nari wo site den'kereba naranai. Kwanri no Daireihuku no gotoki wa tôni aratamari, mata minkanno Syônin mo Haikara Kosumetikku to natta ga, mukeino Yabure-bôsi wa itumade kabutte aruku no da?

**KANGAEMONO.**

[Kotae wa kono Hon no uti ni dokoka ni aru.]

	1	2	3	4	<i>Hakokotoba</i> wa,
I	H	A	M	A	Du no yôni, tate
II	A	K	I	N	to yoko to onazi
III	M	I	E	N	Kazu no Gyô ni
IV	A	N	N	A	naranda Zi no
					Atumari de, sore



wo tateni, 1, 2, 3, 4 no Gyô wo yonda Kotoba ga, yokoni, I, II, III, IV wo yonda Kotoba to onazi yôni naru mono de aru.

20. Tate-yoko sanzi no Hakokotoba de, sore no 3 no Kotoba wa:  
1. Nippon no Kimono ni tuita nagai Mono; 2. Garasu de kosi-raeta Iremono; 3. Nippon de itiban yôyôna Syokubutu. Atete goran!

21. Yahari 3-zi no Hakokotoba de, sore no 3 no Kotoba wa:  
1. Katai Mono; 2. Ôkii Kazu; 3. Hutûno Dôbutu. Nani?

		k		
e	a	m	B	u
o	ô	b	t	u
r	I	i	r	a
n	a	u	n	a

22. Hidarino Zi no Narabi wo Keima-tobi ni yomuto, dare demo sitte oru Nippon no Kotowaza ni naru.

[I no Zi de yomihazimeru].

### 第五章 語の切り續けと大文字の使ひ方。

26. 上に述べた丈で一通りの規則は盡してあるが、ローマ字を使ふ爲に是迄の假名交りを書くに比べて新に注意すべきことが二つあるから、この章で尙それに就て述べる; 即ち 語の切り續けと大文字の使ひ方 とである。

此二つのことは假名交り文では注意しなくてもよいことである故、ローマ字で書く爲に餘計な面倒が生じたやうなものであるが、それを正しく書くと、文章の意味が甚だ取れ易くなり、又假名交り文體では意味が二様にとれて明瞭でない様な場合を區別することが出来るので、それ丈ローマ字文が假名交り文よりも進歩した善いものであると云ふことになるから、これはよく氣をつけて正しく書くべきである。

それに就ての大體の規則は既に述べた通り。(1) 大文字は文章の初めと名詞の初めとに使ふ, (2) 一つの詞を組立てる字を續けて書き、別々の詞は離して書く

と云ふのであるが、實際に當て見ると、大文字を使ってよいか、小文字でよいかわかりにくい場合や、續けて書いたがよいか、離れたがよいかわかりにくい場合が少くない。

下に書くのはこれ等に就てきめ方の大體の方針と例とを示す爲であるが、下に出すのに當らない場合や何かで判断しにくいこともまだあるであらう。

初めてローマ字文を書き習ふ人は、決して離い場合には、先づ成るべく切る方の方針にしたがふ。そして、澤山に書き習ひ、且つ他人の書いたのを澤山に読み習ひ、實地に當て比較研究して宜しいのに從て段々に改良するやうにするがよい。

**27. 名詞。** 名詞の初めの字を大文字で書くが、それに就き注意すべきは—元來は名詞であつても、文法上に特別な意味に使はれてある時は、代名詞又は他の種類の詞の如く見做して大文字を使はない。

**a. anohito, ar okata.**

あの人、「あの方」は本來は *ano Hito, ano Kata* であるは勿論であるが、「あの」の

意が特に軽くて「あの」「この」と指して區別する意がなく、只前に噂をして居た人のことを軽く「あの人」又は「あの方」が杯云ふ場合には之を代名詞と見て *ano-hito, anokata* と書いて宜しい。例へば

*Katô San wo anata wa gosyôti desu na; anohito no Otottsân wa Gunzin desu ka?*

之に反して人を指して「この人」「その人」「あの人」と云ふ時は「人」は全くの名詞で、*kono Hito, ano Hito*

とせねばならない。例へば

*Asoko ni iru ano Hito to, soko ni iru sono Hito to dotira ga Sei ga takai darô?*

**b. hito:** 通常の「人間」の意味の「ひと」は勿論 *Hito* であるが、「他人」と同じ意味に使ふ「ひと」は *hito*:

*Kotowarinaku hito no Mono wo toruna!*

**c. mono:** 動詞の後に殆ど無意味の接續詞に使ふ「もの」は *mono*:

*Â sita mono da kara, konna ni natta.*

「人」の意味に、又は前にある名詞を繰返す代りに使ふ「もの」も同様で、小文字で書く。

Kawarino *mono* wo ukagawa-  
semasu.

Kotoba no utide, *Hito*, *Tukue*  
no yôna *mono* wo Meisi to iu.

但し品物の意の「もの」は Mono ;

Kekkôna *Mono* wo tyôdaisi-  
masite, . . . . .

d. **koto.** 動詞の後に接綴の爲の「こと」(「と云ふこと」の意味の處)は *koto* :

Sore wo mite kita *koto* wo  
kikimasita.

但し「事件」の意ならば *Koto* :

Watasi ga kiite kita *Koto* wo  
ohanasi-simasyô.

e. **t-koro.** 「場所」の意味の「ところ」は *Tokoro* であるが、「時」の意味の「ところ」は *tokoro* :

Mô kaeru *tokoro* desu.

Dekakeru *tokoro* e hito ga  
kita.

「ことがら」などの意の「ところ」も同様 :

Mite kita *tokoro* wo sono-  
mama môsimasu.

Hito no iu *tokoro* ni yoreba,—

Watasi no kangaeru *tokoro*  
dewa,—

「ところが」「ところで」が接綴の爲ならば  
*tokoroga*, *tokorode* :

Sô iuta *tokoroga* (*tokorode*)  
Siyô ga nai.

f. **tokini.** 動詞の後に來る「ときに」「ときには」「ときにも」(同意味の とき、ときは、ときも、)は接綴詞で、*tokini*, *tokiniwa* 等と書く :

Tyôdo iki-tuita *tokini*, Ame  
ga huri-dasita.

又「そのとき(に)」「このとき(に)」杯で「とき」の語が軽いときには、*sonotoki(ni)*, *konotoki(ni)* 等と その この から續けて書く。

他の場合の「時」は *Toki* : 即ち 時が、

時を, 時の, (時には, 時にも, と 言ひかへられない やうな 時は, 時も 等) は Toki ga Toki wo 等。例へば

Tôtyaku no Toki wa mô  
Ziuzi desita.

Dare mo Toki wo usinawanai  
yôni nasai!

g. **tame.** 利益の意の「ため」は  
Tame, 「故に」のやうな意の「爲に」は  
tameni:

Hito no Tame ni naru Koto  
wo nasai!

Kyaku no *tameni* samatage-  
rareta.

h. **hô.** 「その方」「この方」「美しい方」「大  
きい方」等の「方」は代名詞のやうなもの  
で, *hô*; 「方向」「方面」の意の「方」は *Hô*.

Sono *hô*, kono *hô*, ôkina *hô*,

但し

Nisi no *Hô* e, . . . . .

Mansiu no *Hô* dewa, . . . . .

i. **bakari, dake, hodo, gurai,**  
**dokoro,** (*doko*) 杯は前に名詞が來  
ても動詞が來ても離して小文字で書く。

Uti ni *bakari* iru.

Watasi *bakari* yuitemo tuma-  
ranai.

Tarô San wa, kita *dake* de,  
Hanasi mo sezuni kaetta.

Kayu *gurai* wa tabetemo yoi.

Hanami *dokoro* dewa nai.

但し「何々 *bakarina*」「何々 *dakeno*」「何々  
*hodoni*」等の事は後に出す。

j. **uwe, sita, mae, naka, aida,**  
**usiro** 等の詞は元來名詞で大文字  
で書くべきであるが, 何々の上, 何々の  
下等の意で何々を離れて別に上, 下, 等  
が 重い意をなさない 時には小文字で書  
いても宜しい。

Tukue no *uwe* ga kitanai.

Tana no *sita* ni oke!

Byôbu no *usiro* e kakureru.

但し

Ie no *Uti* to *Soto* dewa Atusa  
ga taihen *tigau*.

杯では「うち」と「そと」とが要用な重い名詞になつて居るから大文字にする。又

*Uwe niwa Uwe ga aru.*

*Usiro ni Ki wo tukei!*

杯の様に獨立の語も大文字で書く。

*uweno, sitano, maeno* 等の形容詞のことは後に出す。

**28. 関係詞。** 名詞、代名詞の後に來る が, を, に, の, から, へ 等を離して書くというたが、尙同種の語は と, や, よりも, よりか, まで 等ある。

*Sore yorika kore no hô ga yoi*

問ひの代名詞の なに, どれ, だれ, の 類に か が添うて直接に 問ひに ならない時は、か を前へつけて書く。

*Nanika kôte kiyô.*

*Dareka e yarô.*

併し問ひの か は離す:

*Soko ni iru no wa dare ka?*

**29. はとも。** 名詞の次に が 又は を が來ても意味をなすべき處に、は 又は も が代つてある時には、此 は 又は も を

離して書く。

*Watasi wa mairimasu; anata mo oide desu ka?* (が で意味をなす處)

*Anohito wa Sake wa nomimasen; mata Tabako mo nomimasen.* (を で意味をなす處。)

其他の場合には も と は とは、それをつけなくても意味をなす處へ附加してあるので、此時にはその前の詞に續けて書く。

*Ôsaka ewa mairimasen ga, Kyôto ewa mairimasu.*

*Ani karamo yorosiku to iute kimasita.*

*Yokumo warukumodekimasu.*

[*Yoku dekimasu; waruku dekimasu* をつけて *mo* を添へたもの]

*Kyôwa mairimasen.*

[「けふ参りません」と云ふのへ「は」を添へたもの] 併し

*Kyô wa Nitiyô desu.*

[*Kyô ga Nitiyô desu* の *ga* を *wa* にしたもの]

次の様な語法で動詞の後に来る は と も は離して書く。

*Sô ii wa sinai.*

*Kai wa kôta ga, Okidokoro ga nai.*

*Benkyôsi mo sinaide, . . . . .*

**30. 形容詞。**

a. 善い, 深い, 長い 等の語は勿論であるが、稍長くても、一つの形容詞は一つに續けて書く。

*somatuna Ie,*

*hyôtannarino Ike,*

*keisikitekino Kakituke,*

*hokoridarakena Heya.*

上の様な語では語尾が *na* でも *no* でもどちらでもよい場合が多い。

*otokorasii Hataraki,*

[同じく *rasii* が ついても, *Tenki rasii, hareru rasii* 杯は無論離して書く]

b. *sôna.* 「何々 そうな」も同様:

*samusôna Toti.*

*Kane no arisôna Ie.*

そう の前を離す場合、及び「何々 そうです」杯のことは 65, 66頁にある。

c. *yôna.*

*Tetu no yôna Kokoro.*

*Dokoka de mita yôna Hito.*

*Hito ga kirau yôna Hanasi.*

但し *sonoyôna, konoyôna, anoyôna* はつけて書く。又「何々 やうです」杯のことは 65, 66頁にある。

d. *bakarino, hodono, dakeno, guraina* 等。「何々 ばかりの(な)」「何々 ほどの(な)」「何々 だけの(な)」「何々 ぐらゐの(な)」等も同様:

*Kosiraeta bakarino Tukue.*

*Yama hodona Kamikudu.*

但し これだけの, それぐらゐの(な), それほどの 等は全體つける。

*Koredakeno Sigoto.*

*Soreguraina Koto niwa odorokanai.*

e. *sôiu Koto, âiu Hanasi,*

*kôiu Hito, sonouweno Koto.*

f. 注意. ののついた詞に形容詞のものと名詞へ関係詞ののがついた場合と二通りある。例へば「鐵の性質は何か」といふは「犬の性質は何か」と同様で、鐵は名詞に相違ないが、「鐵の棒は重い」と云ふ時は「鐵製の棒」と云ふことで鐵のは形容詞になる。それ故、前の方は Tetu no Seisitu, 後の方は tetuno Bô と書く。

此區別は特に是等の語の前に この, その 杯を添へて見れば明かになる。

Kono Tetu no Seisitu wa ...

Kono tetuno Bô wa ...

前では鐵を指して Kono Tetu といふもの、後のは Bô を指して Kono Bô といふので tetuno は Bô についた形容の詞である。上のやうに書けば此等の關係が一目してわかる。

g. 上の, 下の, 前の, 後の, 等の語についても同様な區別がある。それが 上のもの, 下のもの 等と同意に使はれてあるときには uwe no, sita no 杯と離して書く。例へば

uwe no tôri, tugi no tôri,  
hoka no Mane.

そうでなく、それが形容詞ならばつけて書く。

uweno Bun, tugino Pêzi,  
hokano Hon.

31. 形容詞 其他へのを付けて名詞のやうにしたものはのを離して書く。

Yoi no wo hitotu kudasai!

Motto dyobuna no ga yoi.

Kore demo yokatta no desu.

動詞へのが添うた例は 35 節にある。

32. 副詞。

a. yoku, takaku, hukaku 等は云ふに及ばず、

kanarazu, zissai, hotondo のやうに一定の語尾のないもの、

hakkirito, hanzento, bon'yarito, 杯のとを有するものもある。

b. 終りににのあるものは、

kireini, keisikitekini の類、

これでもっと 込み入つたものは例へば

Ano Otoko wa Hito ga yosa-sôni mieru.

c. yôni : anata no yôni,  
mite kita yôni hanasu

の如く yôni のあるのは特に多い。中で  
konoyôni, sonoyôni, anoyôni 杯  
はつゞけて書く。

d. Yama hodoni tumu.

Yama hodo tumu.

kurai, kuraini 杯も同様。

但し sorehodo, sorehodoni; kore-  
gurai, koreguraini 等は全體つゞける。

e. 其他 特別なものは

nagaikoto, mangaiti,  
kui-nagara, nomi-nagara,  
Hana wo mi-nagara,  
sonomama, sonomamani,

â sita mama 等。

f. 次のやうなのは名詞へ或行を  
添へて全體で副詞の用をする。これは

名詞を大文字で始め、名詞の後につな  
ぎを置いて添への句を書く。

[但し或は便宜上つなぎを省いてもよい]

Goenryo-naku, Kotowari-naku.  
Goenryo-nasini, Sata-nasini

[但し Goenryo mo naku 杯の時にはつなぎ  
を使はずに離して書く]

Hanami-gatera, Hanami-gate-  
rani; Obosimesi-dôri, Obosi-  
mesi-dôrini の類。

g. 注意。「何々に」と云ふ語には  
假名交りで書いては同様に見えても、副詞  
のものと名詞ににがついたものと二  
種ある。例へば

zissaini yôyôna Koto と

Zissai ni yôyôna Koto とは意味

が違ふ。前の方は真に要なる事、後の方は  
實際の事に要なる事、前の實際には副  
詞で、後の方は名詞の實際へ關係詞の  
にがついたもの。又 Mozi wo atosakini  
kaku は「跡先取違へて書く」の意、Mozi  
wo ato-saki ni kaku は「後と前とに書  
く」の意。



33. 動詞.

a. 書く, 読む 等は云ふに及ばず, 勉強する benkyôsuru, 奮發する hunpattsuru なども各一の動詞.

[但し「勉強をする」と云へば 勉強 は名詞になる故 Benkyô wo suru.]

b. 臨時に組立てたやうな詞は, する の前につなぎを入れて見易くする.

San wo nibai-site Roku ni naru.

[これは特筆大書すべきことだを

Kore wa tokuhitu-taisyosubeki Koto da.

c. 其他のものは

iyagaru, sabisigaru, atugaru

等のがるにて終るもの;又

gôketu-buru, rôzin-mekasu

等も各一の動詞とする.

d. mi-tamae! sinbôsi-tamae!

goenryo-môsu, oide-asobasu

等は組立ての動詞と見て, 上のやうに書

く。但し masu のつくのはつなぎなしに書く。例へば

kimasu, benkyôsimasita.

34. 動詞の語尾。動詞は語尾が變り且つ下に色々の詞がつながるが, 間で詞を切て言て差支ないときは切て書き, 切ては前の部分が語をなさない時はつゞけて書く。切る方は下の d 以下で見るとやうに, 動詞を現在にでも過去にでも使ふことの出来るやうな場合である。つゞける方の例.

a. kaku, kaite, kaita, kaitatte, kakeba, kaitara, kaitaraba, kaitari, kakuto, kakubeki, kakô, kaitarô,

b. kakanai, kakanakatta, kakanakute, kakazuni, kakanaide,

kakumai, kakanakarô, kakanakattarô,

kakaneba, kakanakereba

等で, benkyôsuru, . . . . benkyôsinakereba 等も同様.

[suteyô, ageyô, benkyôsiyô 等は kakô と同格の字であるが, 「様子」の意

味の *yô* は全く別で、これは離して書く  
Ame ga huru *yô* desu.]

c. 此他のつくものは *kaki-nagara*,  
*kaki-tutu*, *kaki-gatera*, *kaki-*  
*tai*, 等。

切る方の例。

d. ならば, なれば: *kaku naraba*,  
*kaita naraba*, *kakô naraba*;  
*kaku nareba*, *kaita nareba*.

e. けれども, なれども: *kaku kere-*  
*domo* .*kaita naredomo*.

f. だるう: *kaku darô*, *kaita darô*.

g. か, が, と, し, に:

*kaku ka*; *kaita ga*;

*kakô to*; *kaita to*, [但し書けばと

同様な意味の書くとは *a* の中に出し  
たやうに *to* をつけて書く];

*Tegami mo kaita si*, ...

*Yoku kangaete miru ni*, ...

h. 文の終りの、呼ぶ さ, よ, ぞ 等;  
*kaku sa!* *kaku yo!*

*kaku zo!* *kaita zo!*

i. さう, やう:

*Doko'ka de mita yô* desu.

*Hito ga kuru sô* desu,

*Mô dekita sôna* mono desu.

但し

*Mô dekite i-sôna* mono desu.

[56 頁の終りの例を見い]

35. の が後へついた動詞は名詞の  
やうになる。

*Mada kaku no* ga takusan aru.

*Mada kakubeki no* ga aru.

*Kaita no* wo motte yuita.

*Kaita no* ni Sumi wo kobosita.

[*Ki* wo tukete *kaita noni*, homete  
*kurenakatta*. の如きのには上の no  
ni と異なる事は明である.]

36. はたらき の形容詞。名詞

の前に来ない形容詞の語尾に就ても  
大體上と同様である。中で、「ある」と云ふ  
字が本来の形容詞の部と連絡して居る  
ものが多い。

a. つゞける 方の例。

*yoi*, *yokatta*, *yokarô*,

yokereba, yokute (-mo) 等

b. 切る方の例: (打消しの語法が  
皆こちらに入る丈は動詞の時と違ふ)

yoku nai, yoku nakarô,  
又 yoi naraba, yoi keredomo,  
yoi ga

等は動詞の時と同様。

c. kireina, keisikitekino のやう  
に な や のついた形容詞を此様に使ふ時は

kirei de aru (kirei da),  
kirei de atta (kirei datta),  
kirei desu, kirei desita,  
kirei de nai, kirei de nakarô

の如く獨立の de を挿む(又は de を挿む  
と同様な言ひ方を使ふ: 即ち d の前で  
離す。又同じ理で, (56, 57, 65 頁を見い)

Hontôni samusô desu.

Mô dekite i-sô desu.

Katakute Isi no yô desu.

37. 接續詞。一通りの使ひ方では離  
して書くべき語でも, それが集つたもの  
が接續詞のやうな定まつた特別の意味に  
使はれる場合にはつゞけて書く。例へば

a. それで, それでは, それでも:

Sore de kaita.

Sore dewa dekinai.

Sore demo dekiru.

} それを以  
て(は, も)  
の意

Sorede, Hito no iu niwa ...

Soredewa kô nasai!

Soredemo watasi wa iware-  
masen.

} 接  
續  
詞

b. そこで:

Soko de o-kaki nasai (其處で)

Sokode, sonotôrini site miru-

to, ..... (接續詞).

c. ところで, ところが:

Sô sita tokorode (又は toderoga)

nani nimo naranai.

但し

Sukosi no tokoro de Ma ni  
awanakatta (50 頁 e を見い).

d. ものの:

Sô wa iu monono, nakanaka  
mudukasii.

e. のに: [35 節の終りの例を見い]

それとも、そして:

Soretomo, kô simasyô ka?

Sosite, dô narimasita ka?

38. 數に關係した語。

a. 大きい數は通常アラビヤ數字で書いて宜しいが、字で書くときには

niziu-iti, sitiziu-go,

sanbyaku-sitiziu-ku,

nisen-gohyaku-rokuziu-roku

杯と書く。[又つなぎなしに續けてもよい]

b. 何人, 何本, 何冊, 何日, 何ヶ月, 何年等の nin, hon, satu, getu (tuki), nen 等は前へつゞけて書く。

數が長くて, わかりにくいときは つなぎ (-) を入れる。

sannin, gohon, tôka, hyaku-

niti, rokkagetu, sangatuki,

ziunen, issennen, niziu-san-

satu, sanman-bon.

c. 但し 2566-nen 等アラビヤ數字を使ふときは 2566 nen のやうに間のつなぎを省いてもよい。

d. 何年, 何月, 何日が 何ヶ年, 何ヶ月, 何ヶ日の意なれば, 上のやうに, 小文字で書くが, 日付なれば各只一つの年, 月, 日の名になつて居る故, 名詞と見なして大文字で書く。

明治三十九年十二月三十一日

Meidi Sanziukunen Ziunigetu  
Sanziuitiniti.

略して, Md. 39n. 12gt. 31nt.

午前, 午後の何時も各一つの時刻の名故大文字でかくが, 其下の半や何分杯は寧ろ分量である故, 小文字で書く。

例へば 十日午前十時  $\left\{ \begin{array}{l} \text{半, 十分} \\ \text{十五分 過ぎ,} \end{array} \right.$

Tôka Gozen Ziuzi  $\left\{ \begin{array}{l} \text{han, zippun.} \\ \text{ziugohun-sugi.} \end{array} \right.$

但し實際に於ては, 分を書く様なときは大抵數字で書く, 15h.-sugi (-mae) 等。

e. 何圓, 何錢; 何尺, 何寸, 等は **b** と同様で

san-en ziugo-sen.

123 en 78 sen.

san-zyaku has-sun,

略して 3 s.k. 8 sn.

数字を使ふときは、上の sk の略字で見  
やうに、其後に來る字の音便の變化にかま  
われない。例へば 三貫、一匁三分を 3 kwan,  
1 monme 3 hun. と書く。

g. 何割, 何倍, 何號, 何番, 何人目, 何人前  
go-wari, hyakubai, 1234-gô,  
5678-ban, ziuinme,  
100-ninmae.

g. 第二號, 第三番 は  
dai nigô, dai sanban.

h. つづ, 毎, 等 の語は離して書く:  
120 dutu, sannin gotoni.

i. 形容詞や副詞になるのは、前の  
規則の通り纏めて書くのを正式とする。

itibanno Hito,  
dai-itigôno Hon,  
Sekai de daiitino Yama,

又は便宜上 dai を離して,  
Sekai de dai itino Yama

としてもよい。但し、「で」を省けば、「世界第  
一の」全體が形容詞故、正式には  
sekai-daiitino Yama.

又は便宜上つなぎを省いて  
Sekai daiitino Yama.

## TENNEN-KAI NO HANASI.

### HAYAI RYOKÔ.

Dô sita naraba, hayai Ryokô ga  
dekiyô? Tada aruite oreba,

1-byô ni 1 mtr.\* han gurai ;

20-notto no hayai Hune ni noreba,

1-byô ni 10 mtr. gurai ;

hizyôni hasiru Uma ni nori-  
tudukereba,

1-byô ni 12 mtr. gurai ;

Kiukô-Kisya de yukeba,

1-byô ni 18 mtr. gurai ;

Bôhû ni turerarete Hûsen de  
yukeba,

1-byô ni 30 mtr. gurai

no Wariai de yukeru.

\*mtr. wa mêtôru no Ryakuzi.

Motto hayai Ryokô wo sitakereba, motto hayai Mono ni notte yukaneba naranai ga, Teppôdama ya Taihō no Tama ni notte yuketa naraba dô darô?

Teppôdama wa, tikagoro no Murata-ziu nado dewa, hizyōni hayakute,

1-byō ni 670 mtr. amari; Taihō no Tama wa, Rikugun no hutūno Tama wa Teppôdama yorimo osoi; nakanawa

1-byō ni 200 mtr. gurai no mono mo aru; keredomo, Kaigun no ôkii no nado wa

1-byō ni 880 mtr. gurai made yuku.

Taihō no Tama wo Kiukō-ressya ni kuraberuto, osoi no de 11-bai, hayai no de 49-bai mo hayai. Kono Wariai de yukuto, 1-niti ni osoi

no wa 4300-ri, hayai no wa 19000-ri yuku.

Tikiu wa Mawari 10000-ri aru kara, osoi Tama wa hutuka-han, hayai Tama wa 13-zikan kakarazuni, Tikiu wo issiusuru Wariai de aru.

“Sikasi, konna Ryokô wa, mosi dekita to sitara, zuibun abunai mono de, nanika ni butukattara Kona-midin!” nado to iute, taiteino Hito wa, warera ga genni Taihō no Tama no Hayasa ni kuraberuyōna hayai Ryokô,—iya Tama yorimo nanbaika hayai Ryokô wo site oru koto ni Ki ga tukanai.

Donna Kodomo demo sitte oru tōri, Tikiu wa marukute, 1-niti ni ippen no Wariai de mawatte oru. Warera wa Tikiu no Men ni kut-tuite oru kara, damatte ite 1-niti

ni Tikiu wo issiusite oru. 1-niti ni 10000-ri wa 1-byô ni 460 mêtôru de, warera wa nakahodono Taihô no Tama no Hayasa de Tikiu wo mawatte oru; tada Dimen mo issyoni ugoite oru mono de aru kara, kono Hayasa ga warera no Ki ni tukanai.

Kangae wo mô sukosi hiroku suruto, warera ga nao hayai Undô wo site oru koto ga sireru. Tikiu wa 1-nen de Taiyô wo hitomawari mawaru. Taiyô wa Tikiu kara 3700 0000-ri no Kyori ni aru; soreyuwe 1-nen no Tikiu no Miti-nori wa  $6.3 \times 3700\ 0000$ -ri, 365 de watte 1-niti ni oyoso 630000-ri, maeno 10000-ri no 63-bai de aru kara, Tikiu ga tonde oru Hayasa wa 1-byô ni  $460 \times 63 = 29000$  mtr. de, Taihô no Tama mo nanimo

oyobu mono dewa nai. Konna Hayasa de warera ga Kûkan wo tonde ryokôsite, sikamo abunai tomo omowazu, ankanto site Ne-oki wo site oru to wa nanto yukwa-ina Ryokô dewa nai ka?

---

### ASOZAN,

#### SEKAI-DAIITINO KWAZAN.

*Tomoda-Tinzô Kun.*

Asozan wa Wagakuni daiitino Kwazan de aru. Sore ga Kemuri wo hukidasu sakanna Arisama wa totemo hokano Kwazan no oyobu tokoro dewa nai. Sikasi-nagara, Sekai Daiiti to iu koto wa dekinai ka? Watakusi wa habakarinku Sekai Daiiti to dangensuru. Muron, Kemuri wo hukidasu koto ni tuitewa, Titiu-



Asozan Dai-hunkwakô no naka ni  
hukidasaretaru Syôkwazan :  
Takadake to Naka-dake.

kai no Tômyôdai to iwarete oru  
**Stromboli** ya, imademo *Lava*\*  
(tokete oru Iwa) wo hukidasite  
Yama no sita no Mura ya Mati wo  
udumeru **Vesuvius**\* wa harukani  
**Asozan** ni masatte oru. Sikasi-  
nagara, Kwazan no Dai-syô wa  
sore kara deru Kemuri no Bun-  
ryô de sadamaru mono dewa nai.

\* Gwaikoku no Kotoba ya Timei nado no  
Yomikata ni tuitewa tugino Bun wo yome !

Tatoeba, 15000-ton no Sentôkan  
ga Zen-sokuryoku de Teki no  
Hune wo oikakete oru tokiniwa,  
sore no hutoi Entotu kara deru  
Kemuri wa donnani sakan de arô  
ka? Sikasinagara, kono Sentôkan  
ga Kôkai wo owatte, Zen-soku-  
ryoku kara Han-sokuryoku to  
nari, Han-sokuryoku kara Bi-  
sokuryoku to natte, ima masani  
Minato ni hairô to suru tokiniwa,  
sono hakidasareru Kemuri wa  
300-ton no Kutikukan nimo oyo-  
banai. **Vesuvius** wa Zen-sokuryo-  
ku de kwatudôsitate oru Kutikukan  
de, **Asozan** wa ima Sekitan wo  
takitukusô to site oru Sentôkan  
de aru.

◁ Kwazan no Dai-syô wa zituni  
sono Kôzô wo motte ronzubeki  
de aru. **Vesuvius** nado wa, Ôisa



kara ieba, makotoni tiisana monô de, Hanasi ni naranai. Koremade Sekai de itiban ôkina Kôzô wo motte oru Kwazan to site sirarete otta mono wa Hawaii no **Kilauea** to iu Yama de aru. Kono Kwazan no Hunkwakô no Sasiwatasi ga Wagakuni no Risû de hotondo 4-ri de aru towa odorokubeki de aru. Sikasi, kono Yama wa imawa kwatudôsitate oranai. Tokoroga, **Asozan** no Hunkwakô wa sarani ôkii. Sasiwatasi ga, midikai Tokoro de 4-ri, nagai Tokoro de 6-ri de aru. Amerika no *Young* to iu Hito ga arawasita Tenmongaku no Hon ni, Tuki no Kwazan no Hanasi wo suru tameni, Tikiu no uwe no itiban ôkii Hunkwakô wa Nippon no **Asozan** no de, Sasiwatasi ga

7-mile aru to kaite aru. Sikasinagara, **Asozan** no Hunkwakô no makotono Sasiwatasi wa, sore-dokoro dewa nai, 6-ri sunawati 15-mile de aru.

Tikagoro, **Asozan** no Hunkwakô e tobikonde sinu Hito ga aru. Sikasi sore wa kono 6-ri no Hunkwakô no Naka e tobikomumu no dewa nai. Kono Dai-hunkwakô wa, ikumannen ka no Mukasi ni Hunkwa ga yande, hiroi Nohara to natta no de aru. Kono Dai-hunkwakô no Naka wa imawa Asogun to iwarete otte, 40000 no Hito ga sunde oru. Kono Dai-hunkwakô sunawati Asogun no mannaka ni, atode hukidasareta 6-7-kono Syô-kwazan ga aru. Korera wa mina, itiziwa, **Vesuvius** hodo kwatudôsita de arô. Si-

kasi, imawa, mina Hunkwa ga yande, sorera no mannaka no **Nakadake** to iu Yama bakar iga kasukani Hunkwa wo tudukete oru. Makotoni Dai-Kwazan no Nare-no-hate wa kono tōri ka to awareni omowareru. Sikasi, sore-dakeno kasukana Hunkwa demo,



Aso-Nakadake no Hunkwakō no naka no Kemuri no deru Kuti.

imawa Wagakuni Daiiti de ari, katu tokidoki sakanna Bakuretu wo suru. Sono Toki niwa Yama no uwe no Tyamise no mono wa

Yama no sita e nigete kudaru to iu koto de aru. Konoyōna Bakuretu wa 10-nen kara 20-nen kurai ni itido okoru. Tikagoro no cmonaru Bakuretu wa tugino Toki ni okotta :

Meidi	39	nen,	6	getu;
„	27	„	3	„
„	17	„	3	„
„	5	„	3	„

**Asozan** no Dai-hunkwakō no Sasiwatasi ga 6-ri mo aru to sureba, **Asozan Zentai** wa dorehodo no Ōisa de arō ka?

Kwazan ga hazimete dekiru to iniwa, taitei **Huzisan** no yōna Katati ni naru. Kemuri wo sakanni huki, *Lava* wo takusan nagasu no wa, kono Toki de aru. Sononoti Da-bakuretu ga okotte, Yama no Hanbun-

izyô ga hukitobasarete, ato ni Susono to Dai-hunkwakô to ga nokoru. Kore ga Kwazan no tûreino Nariyuki de aru. **Huzisan** wa ayauku kono Bakuretu wo manukareta mono to omowareru. **Asozan** wa kono Unmei wo manukarenakatta. Sono Bakuretu ni yotte dekita Dai-hunkwakô wa, maeni nobeta tôri, Sasiwatasi ga 6-ri aru. Mata torinokosareta Susono wa Tyokkei 30-ri hodo no Hirosa wo ôi, Higo no Kumamoto kara Hiuga ya Bungo no Kaigan made hirogatte oru. Aru Hito ga Dairen no Sanbasi e agatte, Sanbasi wa doko ni aru ka to taduneta sô de aru ga, Ôita ya Nobeoka e itte, **Asozan no Susono** wa doko ni aru to taduneru koto wa, tyôdo Sanbasi e

agatte Sanbasi wa doko ni aru to iu to onazi de aru.

Mosimo Asozan ga bakuretu-sinaide motono Katati wo nokosite otta naraba, **Huzisan** yorimo ôkii Yama de atta kamo sirenai. Sikasinagara, bakuretusita ato no Dai-hunkwakô no naka ni takusan no Syô-Kwazan ga hukidasarete, sorera ga mata bakuretusite, Kwazan no Owari wo tugete oru koto ga, Asozan e yuku Hito ni wa akirakani wakaruru. **Huzisan** wa takakute Soto no Nagame ga yoi; atakamo Tô no gotoku de aru. **Asozan** wa ôkii, sôsitate Kôzô ga komi-itte oru; Daigaran ni tatoete yokarô.

---

## 外國の人名や地名の 書き方と読み方。

1. 外國の地名の中で五大洲の名や國の名の中には外國の言ひ方を全く離れて特別な日本の言ひ方が出来たのがある: Yôroppa, Igrisu, Doitu 等は其例である。アフリカやフランスはそれ程外國の言ひ方と違はないけれども、前のものと同種類の地名であるから、矢張全く日本流になって居ると見てよからう。故に, Ahurika, Huransu と書いてよい。  
五大洲の名と主な國の名は日本流に綴てよい。

但し書く人が外國の綴り方を知て居て、それを使ひたければ、それを使つても差支ない。それに従へば、アフリカ、フランスは Afrika 又は Africa, France となる。

2. 都府、山、川等の名は全く外國の言ひ方を離れて居るやうに日本化しては居ない; 假令發音が全く外國の通りでなくても、なるべくそれに近いやうに言て居る。即ち上のイギリス、ドイツのやうなことがない。

それ故、都府、山、川等の名は[實際多くの日本人が出来出来ないに拘らず]外國の言ひ方を正しいと見做し、綴り方も外國の儘にするがよい。

勿論かくすれば、今迄地理書で假名で習て居た地名をローマ字で書くことが出来なくなるが、それは別段に習はねばならない。

一二の都會の綴り方:

ロンドン	London
パリ	Paris
ベルリン	Berlin
ウィーン又は#ンナ	Wien, Vienna
ローマ	Roma
ワシントン	Washington
ニューヨルク	New York

上の Asozan の文の中の山の名 Stromboli Vesuvius 等は此類である。

3. 人の名は勿論都府、山、川と同様で、向ふの綴りに従はねばならない。

ナポレオン,	Napoleon (Napoleonではない);
ネルソン,	Nelson (Nerusonではない);
ビスマルク,	Bismarck (Bisumarukuではない);